
メロン三丁目、めぞんディコメ

水沢 莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メロン三丁目、めぞんディコメ

【Nコード】

N6815C

【作者名】

水沢 莉

【あらすじ】

連載一時中断中：インチキ商品に意外な効果大発見！コンシエルジュとの接触で次第に明らかになってくるめぞんディコメ？の様子。メロン三丁目？での生活がいよいよ始まります。町、アパートで繰り広げられるコメディ小説。

序（前書き）

連載一時中断中です。すみません。

あとがきを稀に更新してます。

近況報告はそちらで確認をお願いします。v)

;)

序

ここに一つの町がある。

某県の隅っこに位置する田舎町。

吹けば飛ぶような小さな集落だ。

俺がこの町に越してきて、もうじき三ヶ月になる。

健康器具を扱う怪しげな会社の営業マンを勤める俺は、転勤という形でこの町にやってきたはずだった。

はつきり言うと、この会社の健康器具の効果は営業マンである俺にすら分からない。もっとはつきり言ってしまうえば、インチキ商品を売っているので効果なんて無い。

しかし、どうして商品を買う気になったのかこちらが聞きたいお年寄りなんかは、「お宅の商品は最高だ」と偶に電話をかけてきてまで褒めてくれる。

なので一概に効果が無いとは言いつけないのが不思議だ。

まあ、そんなお客は稀の稀もいところで、営業というよりも押し売りに近いセールスで一件一件を歩きまわって何とか経営を成り立っている俺の会社は、一度も顔を見たことのない社長をトップに、営業部長、俺、同僚：順に「斉藤部長」「近藤弘道」「加藤剛志」の「再婚か！（斉・近・加）のトリプル藤^{ふじ}」の三人と、パートのおばちゃん数名で首都圏の片隅に事務所を設けて運営されている。

ちなみに商品はすべてパートのおばちゃんらの手作りという名の工作にて完成されている。

同じ商品にもかかわらず、その一つ一つの大きさ・形状が微妙にずれているのはそのせいだ。

「あたしだったら絶対に買わないね」と口々にもらし、煎餅片手に昼ドラを見ながら作り上がったおばちゃん達の作品。

脳みそを鍛える商品の売れ行きが伸びている今の現状を取り入れようとした一度も顔を見たことのない社長の、無謀というより思いつ

きの企画だった。

それがいつの間にか商品化され、煎餅の欠片が散らばるおばちゃん達の作業テーブルの上に積み重なっていた。

今期の主力商品にしようと社長が目論んでいるその健康器具は、プラスチック製の帽子のてっぺんにアルミ製の5センチ程度の触覚が差し込まれた見るも無様なかぶり物だった。

「至るところから発せられている電磁波の有効利用。触覚を通してクリーンな電磁波に変え、脳に刺激を与えます」という意味の分からないキャッチコピーがつけられた『脳を鍛える摩訶不思議なヘルメット』。ネーミングも微妙だった。

おもちゃ以下のその健康器具のセールスが三ヶ月前から開始される事になった。

それを「売って売って売りまくれ」という上からの命令でこの町へ転勤になったのだった。

引越してきてから気づいたのだが、肝心の転勤先である建物はどこにも見当たらなかった。

この町に着いた初日、大量のヘルメットを抱えながら一日掛かりで事務所を探してまわったが、それらしきビルも小屋すらも見あたらなかった。

「あのお、転勤先の事務所がどこにもないんですけど」

携帯の繋がらない田舎町で、ガラス戸に虫の死骸がへばり付く電話ボックスをやっと見つけた俺は、真夏の太陽の下で汗だくになりながら斉藤部長に電話を入れた。

「事務所があるなんて、いつ、誰が、どこで、誰に言った？」

緑の受話器の向こうで、低く太いが、権力不足丸出しの斉藤部長の声が答えた。

「一ヶ月前、部長が、キャメロンダンスで、俺に言いましたよね」
噴出す汗をタオルで拭いながら電話ボックスのガラスに寄りかかった。

ちなみに「キャメロンデヤンス」とは、部長行きつけの外国人パブだ。

社長命令という転勤の話をそのパブで聞かされた。

調度、部長が金髪女のむちむちの太ももを「大根みたいに綺麗な色だねえ」と見当違いな褒めセリフを吐いていた時だった。

「転勤とは言ってないぞ。いや、言ったかもしれないが、その町で営業して来いという意味で言っただけだ」

「でも一年間って言いましたよね」

「一年間と言ったが、転勤とは言ってないぞ。いや、言ったかもしれないが、そもそもうちの会社に支社なんてもんは無い」

耳を疑った。すべてにおいて俺の勤める会社はインチキだった。

「こんなに遠くまで行かせて、アパートまで借りさせて、勤務先の事務所もないまま、営業し続けると？」

「ま、アパートを事務所だと思え」

「一年つて、えらい長い営業ですけど」

「1000個売れたら、すぐにでも帰ってきていいぞ。じゃ、しっかり仕事してくれ」

それだけ言い残されると、「ぶ」という屁に似た音と共に電話は切れた。

「もしもし！？もしもし！部長！？」なんて切れた電話に必死に呼びかけるアホな役者のような事はしなかった。

電話ボックスのガラス戸の向こうに広がる田んぼを見つめて受話器を戻した。

1000個だ？ 冗談のつもりか。このおもちゃ以下の不細工なヘルメットが1000個さばけると本気で思っているのか。

その前に深刻な問題があった。散々歩き回ったが、どう見ても1000個売れるような町では無いのだ。

なぜって、1000件の家が無いのだ。

というか、なぜこの町に行けと命令が出たのかを知りたかった。もう一度受話器を手にした。だが足元に置いた大量のヘルメットが

入ったダンボールを見ながらため息が漏れた時、すでに、もうどうにでもなれという気持ちに変わっていた。

目の前に広がる田んぼの中央に立てられた妙にリアルな力カシが黙って俺を見ていた。

その藁のはみ出した頭の上に乗ったカラスが、時折黒すぎる翼を持ち上げて「バカアーバカアー」と俺の気持ちを代弁するかのよう

うに鳴いていた。

強ち間違っではいませんでした

まだ太陽は青々と広がる空のてっぺんにある。

町を取り囲むようにぐるりと緑が走るその向こうには綿菓子のような入道雲が立ち上り、何となく雨の気配が伺えた。

一匹の蛾が電話ボックスのガラスに体当たりをし、そのままひらひらとヘルメットで埋め尽くされたダンボールへと落ちていった。

ヘルメットに光る触覚が陽射しを浴びてギラギラと目を刺す。

いくつもの光る触角の隙間から先ほどの蛾が這い出してきた、黄色いヘルメットに粉を撒き散らしてから田んぼの向こうへ消えていった。

その後を目で追い視線のたどり着いた先の緑の上には怪しげな雲が広がり始めていた。

蛾がガラスにぶつかりヘルメットの海に溺れて這い上がってくるまでの僅かな間で、先ほどまで広がっていた青い空はうっすらと灰がかかっている。

相変わらず立ち上る入道雲のずっと奥からゴロゴロと嫌な音が響いていた。

これだけのヘルメットを抱えながら雨に降られたりしたら溜まったもんじゃない。

いくらインチキ商品とはいえ、一応今期の主力商品であることは間違いない。

今でこそまるで役立たずのヘルメットだが、雨に濡れたりなぞしたらもっと役に立たなくなってしまう可能性が非常に高い。

なんとたつてオバちゃんの工作品だ。ボンド、いや糊でくっつけたであろう銀色の触覚が取れてしまう。

電話ボックスを出て雲に覆われ始めた空を見上げてからダンボールを持ち上げた。

目の前に銀色の触覚。

ふつと一つため息を吹きかけたら、蛾の撒き散らした粉が汗まみれの顔面に飛びついた。

「なんだかなあ」

とりあえず借りたアパートへダンボールを非難させなくては。

砂利と土の混じった道を歩き始めたその農道の向こうに赤サビで覆われた二階建てアパートの屋根が見える。

会社を出る直前に斉藤部長に渡された手書きの汚い地図に記された場所にあるアパートのようだ。見て直ぐに分かった。

部長の手書き地図には一本の線と時折その横から伸びる短い線と「池」と書かれた丸、その斜め向かいに星模様が書かれてあり、矢印が向けられ「ココ」と書いてあった。

「部長、なんですかこれ」

「なんですかって地図じゃないか」

広告の裏に鉛筆でうつすらと書かれた地図を手にしながら、鉛筆削りを黙々と続ける斉藤部長の頭のハゲに息を漏らした。

「いや、それは見て分かりますけども。線と丸と星だけの場所ですか」

「違うぞ」

「いや、線と丸と星だけじゃないですか」

「道と池とアパートだけだ」

削る途中で何度も芯を折り、13センチほどあった鉛筆が7センチまで身長を縮めた姿を誇らしげに眺める部長は次の鉛筆を手にしなから当たり前のように答えた。

「だからそうじゃなくて。こんな安易な地図でアパートを見つけれんんですか」

「このとおりだから仕方無いだろう。無いものを書くことは出来ない」

今向こうに見える赤サビ屋根の向かいにはどぶのような池が横たわっている。

こんな地図で場所なんて分かるかと思っていたのだが、単純な地図どおりにそこにある光景に頭の奥で笑うより仕方なかった。

広告の端の方には「メロン三丁目、めぞんディコメ」と書いてある。俺の営業先である町名と住まうことになるアパートの名前だということには始め気づかなかった。

気づけるわけないだろう。「キヤメロンデヤンス」同様、また部長の訳の分からない行き着けパブの名前か何かだと思っていた。

「部長、メロン三丁目、めぞんディコメってまたすごい店見つけましたね」

「店？」

「これ、コメディアン上がりのオカマか何かが開いたパブなんでしょう？俺は行きませんからね、キヤメロンでもう十分ですから」

「何を言っている」

「もう少しまともな店に連れてってくださいよ。しかも店の名前入りメモ用紙同然の広告の裏になんて営業先の地図を書かないでもらえますか」

「そんな店、聞いたこともない」

「は？ じゃなんですかこれ、メロン三丁目、めぞんディコメって」
「お前の行き先に決まってるだろう」

部長の手に握られていた新品の鉛筆はすでに4回ほどポキリと音を立てていた。

「行き先？」

「そうだ」

「メロン三丁目？」

「そうだ」

「めぞんディコメ？」

「そうだけど？」

「からかってるんですか」

「よし」

ようやく尖った鉛筆の芯を満足げに眺める部長の手の中には9センチ

ちほどの身長になってしまったHBが切なそうに顔をのぞかせていた。

「部長、聞いてます?」

「聞いている。だから返事してるんだろ?」

「俺の営業先って、これがですか」

「そうだ」

「一体何なんですか、このふざけた名前は」

「違ってたかな」

「はい?」

「そんな感じの名前だった気がするんだが」

「そんな感じって」

「社長からの又聞きだったからな」

「社長は一体何処にいるんです? 一回も顔見たことないんですけど」

「まあ、その県に行って、その電車に乗って、そのバスに乗って2つ目で降りれば町名もアパート名もはつきりするだろう」

社長の話はあっさりとスルーされ、行くだけ行けば何とかなる的返事を返されただけだった。

「アバウト過ぎやしないですか」

「そんなニュアンスの名前だったから大丈夫だ」

今俺の手の中にはその地図がある。

斉藤部長の言うように、この県に来て、あの電車に乗って、あのバスに乗って2つ目で降りた場所がこの町だったわけだ。

降りる直前でバス内に響いた運転手の声は「三丁目」

ダンボールを抱えながら降りたバス停に書かれていた町名を見て斉藤部長の間抜けなヒアリング結果に何となく納得した。

『明金三丁目』

金どころか緑の田んぼが青々と広がる風景の町名とは信じがたいも

のだったが、『メロン三丁目』ではない事にいくらか安心し、だが幾分かがっかりしたのも事実だ。

メロン三丁目ならそれはそれで面白かったのだが。

コケの匂いが鼻先にまわりつく池の脇を過ぎ、赤サビ屋根のアパート前にたどり着いた。

一階に三棟、二階に三棟の木造アパート。

古い外観にベランダの柵の水色だけが鮮やかだった。

おそらくペンキ塗りがたてだろう、木造の壁には所々水色のペンキが垂れた跡が不様に線を引いていた。暑さも手伝ってかアパートが流す汗のようにも見えた。

少しの不安と胸に燦る期待を持ってアパートの数メートル先に建てられている看板に視線を移した。

『メゾン・デ・孝明^{こつめい}』

「・・・・・・・・」

どう反応すれば良かったか。

斉藤部長のヒアリングは強ち間違っただけではなかった。メゾンデまでは完璧だ。

ディコメと解釈した部長も部長だが、この名前をつけた管理人も管理人だ。

自身の名前か。しかし何故この結果だ。

せっかく意気込んでフランス風にメゾン・デまで付けて、結局最後に「孝明」なのか。

何のリアクションも示せず、ただ己の無言の傍でカエルの声だけが陽気に笑っていた。

完璧に広がった黒い雲の奥に稲光が垣間見え、目の前に抱えたヘルメットの黄色にとうとうポツリと雨粒が落ちてきた。

レ・ミゼラブル

「やべ」

俺は先ほどまで呆けて眺めていた『メゾン・デ・孝明』の看板の横を慌てて走り過ぎ、アパートの裏手へ回った。

各々の部屋の前には黒く塗られた玄関扉が並んでいる。

同じように赤い錆びたポストがその隣に設けられている。

壁にぴたりと身体を押し付け、ふうと息を吐いたその瞬間、天が何かを思い出したかのようにバケツをひっくり返したかのような雨が落ちてきた。

「危ない危ない」

間一髪だった。ヘルメットには数滴の雨粒が光るものの、てっぺんの触覚は全て無事だった。

「で、俺の部屋はどこだ？」

斉藤部長からは『めぞんディコメ』というネーミングしか情報は入っていないかった。

アパートの手配は部長が進めてくれていた。

部長が手配するという事にもっと慎重になっておくべきだった。

「とりあえず俺から管理人に連絡しておいたから心配ない。鍵は行つたその時にもらつてくれ」

「その日にですか」

「その日にだ」

「何号室とかは…」

「分かん」

「引越し荷物とかもあるんですけど」

「ヘルメットだけでもっていけば何もいらんだろっ」

「ヘルメットで生活ができますか。俺も一応人間ですし、家電も欲しければ家具だって必要最低限のものは欲しいですよ」

「じゃ、あとから送ればいい」

「俺が引越してしまったら、一体誰が荷物を送ってくれるんですか」

「加藤にでも頼んでおけ」

こんな調子だったものだから、俺は本当に手荷物一つとヘルメットのダンボールしか引越し初日は持ち込んでいなかったのだ。

仕方なく俺は部長に言われた通りに後輩の加藤に荷物の発送を頼むことにした。

「任せてください。とりあえずアパートに着いたら連絡ください」

「悪いな。こんなはずじゃなかったんだけど。部長が相変わらずでさ」

「まあ、斉藤部長の手配ですからね、当てにしたらまずいですよ」

「アパートの名前もあやふや、何号室かさえも分からない。参ったな」

「仕方ないっすよ。ちゃんとした住所分かったら教えてくださいね。直ぐに米送りますから」

「…米って」

俺は加藤を当てにしてもよいのだろうか。

ニコニコと微笑む加藤の顔面に斉藤部長の影が被った。

「いや、米とかは現地で調達できるし、その前に必要なものってあるだろう」

「水ですか」

「…そうだな。とにかく着いたら連絡する。そのときに必要なものを全て言うから、ちゃんとメモを取りながら聞いてくれ、加藤」

「任せてくださいっすよ」

頼もしい後輩の言葉を胸にその夜俺はいそいそと荷物をまとめたのだった。

ますます雨足が強くなってきた。

アパートの裏には切り立った崖が数十メートル上まで伸びている。

その上にはやはり緑がびつしりと生い茂り、背景に広がる黒い雲の中で稲光が燦っていた。

ゴロゴロという音はさっきよりも近づいている。

崖を伝って降りてくる雨水が玄関前の土に這いつくばり薄い湖ができかかっている。

先ほどの暑さに焼けた土は、雨水を含んでミミズの匂いを放っていた。

壁に寄りかかったまま左隣にある黒い玄関扉、一階の左端の部屋の表札を見る。

『concierge（コンシェルジュ：門番）』

「は？ コンシェルジュ？」

赤いマジックペンでへたくそに書かれたフランス語。

もしかしたら管理人室か。

何なんだ、俺は一体どんなところへ来てしまったのだ。

しばらくその赤い文字から目を離せなかった。

激しい雨は足元にも時折ぴしゃりと跳ね返る。

このままここに立っているわけにもいかない。

抱えたダンボールを下ろすこともままならず、左腕とアゴで箱を抱えながら赤いポストの横の呼び鈴をやや緊張しながら押した。

『ボンジュール！』

「……」

なんだこの呼び鈴の音は。

音じゃない。肉声じゃないか。しかも「ボンジュール」って。

このときから既にこのアパートの怪しさが伺えていたのだ。

俺が呆氣にとられていると、中から男の声がした。

「はい」

コンシェルジュは普通に日本語を発していた。日本人であることは間違いない。やや安心した。

「あの、コンシェルジュ…管理人さんですか？」

「コンシェルジュです」

「コン：この管理人にあたる方ですか？」

「そうですけど」

「今日からお世話になる近藤です」

「ああ、はいはい、斉藤さんから聞いてましたよ」

「俺の部屋、何号室ですかね」

「ああ、ちよつと待っててください、今開けますから」

鍵を外す音の後に扉が開き、中から太った中年男が顔を覗かせた。もはや日本人であることは明らかだったが、白いタンクトップにハーフパンツという、おにぎりが非常に良く似合うであろうオヤジがにっこりと微笑んでいた。

コンシェルジュの言葉にじっくりこな過ぎるその容姿にただマジマジと視線をぶつける事しか出来なかった。

「ボンジュール！」

「…はじめまして。お世話になります」

「いやいや、すごい荷物ですね、何ですかそれ？」

「会社の商品です」

「雨の中大変だったでしょう。今お部屋に案内しますからね」

「お願いします」

「近藤さんの部屋は二階の真ん中になりますからね。あ、そうそう私は内藤です。宜しくお願いしますね」

「内藤：孝明さんですか？」

「いえ、内藤康夫です」

「…そうですか」

コンシェルジュは俺の前を歩き、二階へ続く階段を上り始めた。ゆっさゆっさとハーフパンツの中の尻が揺れている。

「営業ですってね」

「ええ」

「大変ですね」

「ええ」

「まあ、この町の住人は皆いい人ばかりです。きっと売れますよ」

「そうですね」

「分かりませんがね」

二階の真ん中の黒い扉の前に着き、管理人…コンシェルジュは振り向いた。

「こちらです」

「どうも」

「今、鍵を開けますからね」

「はい」

扉に鍵を突っ込みカチャリと音を立てるコンシェルジュが前かがみになる。

その背中越しから見えた扉の表札に釘付けになった。

『Les misérables』

「レ…」

「ミゼラブルです。レ・ミゼラブルが近藤さんのお部屋の名前です」

「レ・ミゼラブル…たしか…ヴィクトル・ユゴーの」

「このお部屋、ちょっと名前があれで、敬遠されがちですね。その分お安くなってますから」

「ああ、無情…」

「まあ、そんな感じです。“哀れな人々”って訳するのが正しいんですけどね」

「……」

「知ってるフランス語を使ったらこうなったっていただけですから。気にしないでください。逆にカッコいいじゃないですか。素敵な響きですよ、レ・ミゼラブル」

ダンボールを抱える腕から力が抜けた。

寸でのところでヘルメットの落下は食い止めたが、田舎町へ営業へ行かされた哀れな身に、見事に哀れの称号を与えられた事で二階まで立ち上るミミズの匂いが絡み付いた。

泥土の上を這いつくばっているような感覚が全身を覆った。

「じゃ、こちらが鍵です。落ちていたら内線でもください。お茶を

用意しますから」

「…はい」

「これから宜しく願いしますね」

「…宜しく願いします」

内藤コンシエルジュはにっこりと微笑み階段を降りていった。

階段を一步降りる度にゆっさゆっさと揺れる腹の肉を眺め、まだゴウゴウと降る雨音を聞きながらその場に立ち尽くしていた。

崖を伝う雨は俺の涙か。

黒い扉に振り返ると、フランス語の赤文字が「ああ、無情」とだけ俺に囁いていた。

被ってみたら大発見

“哀れな人”の称号を与えられた俺は、まさに“ああ、無情”な気分です。レ・ミゼラブル室に足を踏み入れました。

何故「レ・ミゼラブル室」なのか。

いや別に「レ・ミゼラブル」の意味に落ち込んでいるのではない。いやいや落ち込んでいるのは確かだが、「レ・ミゼラブル」に腹を立てているわけでもない。

何故フランス語なのかということでもない。

何故「A号室」や「1号室」といった普通の部屋名を付けられなかったのか。

そこだ。

一体誰が名づけたのか。

あの管理人か。内藤コンシエルジュか。

コンシエルジュ……今更だが何故コンシエルジュなのかということも気になり始めた。

どの面下げてコンシエルジュを名乗るか。

あの腹と尻はどう鼻^{ひなめ}目で見ても裸の何とかだ。

玄関に入ってしまったら謎のコンシエルジュとレ・ミゼラブルについて頭を悩まされたが、裏山に落ちたのだろうか、ドドドーンという落雷の音に我に返った。

「ま、どうでもいい」

そもそも斉藤部長が探した物件だ。こんな事が起こっても仕方がない。

むしろこうなっただけで済むべきだ。「キヤメロンデヤンス」に通う部長だ。

明金三丁目を「メロン三丁目」、メゾン・デ・孝明を「めぞんディコメ」と何食わぬ顔で地図に書き添えた男のやることだ。

俺が斉藤部長に電話でもして「レ・ミゼラブル室でした」と報告す

れば、きっと「レミ イズ ワンダフル？ 楽しそうな部屋だな」と返してくるに違いない。
ま、それでもどうでもいい。

俺は靴を脱ぎ台所に踏み入った。およそ三畳分のスペースに流しとガス台が備え付けられている。

そこにヘルメットの入ったダンボールを下ろし、雨のせいで余計に薄暗くなっている狭い部屋を見渡した。

フローリングではない。畳貼りの六畳部屋。向かって右手側の襖ふすまを開けるとやはり畳貼りだが三畳部屋が隣接していた。

意外にも部屋は小綺麗だった。

それもそうか。名前からして敬遠される部屋だ。殆ど使われていなかったと見るのが正しいのだろう。

というよりも長いこと空き部屋だったに違いない。

以前この部屋を使っていたかもしれない主の生活臭は微塵も残されていなかった。

目の前のベランダ用のガラスには激しい雨が音を立てて吹き付けている。

灰色に曇ったそこには時折稲光が縦に反射した。

立て付けが悪そうなガラス戸はガタガタと震えている。

振り返ると、後ろの壁に内線用の電話が掛けられていた。

「落ち着いたら内線でもください」と言ったコンシェルジュの言葉にやや違和感を抱えながら返事を返していたが、これのことだったのか。

こんなちっぽけなアパートに果たして内線電話など必要なのだろうか。

どんな用事で使うのだ。

刹那そんなことを思ったが、その場はそれ以上深く考えることもなく次の思考に頭のスイッチは切り替わっていた。

当たり前だが部屋はがらんとした。内線用電話以外何もない。

その壁の向こうに目をやれば、湿気を含んだせいで形がゆがみ始めているヘルメット入りダンボールが台所の床に所在無げに佇んでいるだけだった。

「さて、これからの今日一日をどう過ごそうか」

俺が引越しに持ち込んだ荷物はヘルメットと僅かばかりの金とカツプ麺だけだ。

幸いガスコンロは備え付けてあるものの、肝心のやかんも鍋もない状態だ。

夕食は乾燥麺そのまま丸かじりか。

それは避けたかった。

それじゃなくとも“ああ、無情”状態なのだ。

何も無い部屋で麺とかやくをそのまま頬張る己の姿を想像し、背筋に悪寒が走った。

しばらくガラス越しから降りしきる豪雨を眺め、俺の手は無意識に携帯電話に伸びていた。

ポケットに手をつ込み、慣れ親しんだその感触に触れた直後に思い出した。

この町に降り立った時から既に圏外だったと。

おそろおそろ携帯を開く。確認するまでもなく普通に圏外だった。

「だよな」

自分の顔に苦笑が浮かぶのが分かる。

しかし俺は諦められなかった。

六畳の部屋を歩き回り僅かな電波を探った。

分かりきっていたことだが結果は虚しいものだった。

圏外の文字は一本の線を表示することさえも許さずそこに陣取ったままだった。

それでも諦めきれない俺は隣りの三畳部屋に移動し、やはり隅々まで歩き回った。

しかし結果は同じことだった。

「これじゃ加藤に連絡すら入れられん」

途方に暮れた俺の目の隅に、再び窓から差し込んだ稲光に反射する銀色が飛び込んできた。

台所に置いたヘルメットの触覚だ。

黄色の上に乗ったやけにキラキラと光る触覚に俺の足は無意識にそのダンボールへ引き寄せられていた。

「これに水でも入れて火にかけてみるか」

ため息混じりに漏れた馬鹿な発想がヘルメットの山に飲み込まれていく。

俺の声など受け止めているはずもないヘルメット達はただ無言のまま整然と箱の中で積み重なっていた。

「そういえばこのヘルメット、一回も被ったことないな」

それもそうだ。こんな不細工な代物、誰が好き好んで被ったりするだろう。

一つを手にし、その間抜けな姿をマジマジと眺めた。

「電磁波の有効利用ねえ」

言いながらそいつを頭に乘せてみた。他にすることが無かったのだ。トイレのドアを開け、そこにある鏡に自分の姿を映して笑いが漏れた。

少しばかり左寄りに傾いているが、それでもピンと立った触覚が頭の上で白熱灯の光を浴びて輝いている。

スーツ姿の身に黄色の触覚付ヘルメット。

「アホな現場監督か」

しかし何故かカポリと頭にフィットする感触が思いのほか心地よく感じられた。

意外な被り心地のよさに驚いた。

加えて全身をピリピリと何かが走る。

例えるならばそれは整体などで受ける電気治療のようなものだった。その妙な心地よさから、俺は己の間抜けな姿を携帯カメラに収めておこうと思いついた。

頭から流れ込むピリピリとした感覚は携帯を開く指先にも伝わって

いる。

「ん？」

携帯を見る俺の目がある一箇所で固まった。

小さな画面の左上、そこにあるはずの圏外の文字が無くなっていたのだ。

「え？」

無くなっているということはそう、電波状況を示す棒が立っているのだ。

しかも2本。

「何だこれ」

驚いた俺は鏡に視線を移し、そこに移る自分の姿を再び凝視した。相変わらず間抜けな現場監督と化した己が呆けた顔でこちらを伺っている。

気のせいかてつぺんの触覚が自ら光を放っているようにも見えた。

「もしかしたらコイツか」

訝りながらヘルメットに手をかけ頭から外した。

途端先ほどまで身体を巡っていたピリピリという感覚がピタリと無くなった。

慌てて携帯を確認してみる。

そこには圏外の文字が再び表示されていた。

「マジで？」

急いでヘルメットを被り直し、もう一度携帯を覗き込んだ。

「立ってる……」

バリサンとまではいかないが、話をするには十分の二本線がきつちり并表示されていた。

「あり得ない……」

俺は狂ったように蒸し暑さも忘れて狭いトイレの中でヘルメットを被ったり外したりを繰り返した。

被る度に線が立ち、外すたびに圏外が表示される。

腕の上げ下げによる筋肉の痛みとじつとりと流れる汗に覆われた俺

の身体は少しばかり震えていた。

ヘルメットの被りすぎでボサボサに乱れた髪は鏡の俺は鏡の中で頬が赤かった。

「これは、ひよつとするとひよつとするぞ」

『脳を鍛える摩訶不思議なヘルメット』、これは初めから嘘っぱちだ。脳など鍛えてくれるはずもない。まずはネーミングの見直しだ。『電磁波の有効利用』そこら辺は正しいのかどうか分からないが、まるっきりの外れなキャッチコピーでもないだろう。しかし少し手を加える必要はありそうだ。

どうしてなのか、何がそうさせるのか、説明はつかないが電波を引き寄せる効果があるのは確かだ。自分で立証済みだ。

興奮のせいなのか、はたまたピリピリという電気のようなもののせいなのか、とにかくにもプルプルと痙攣にも似た震えが走る指先をボタンに乗せて、俺は加藤の名前をスルーし、斉藤部長へ電話を入れたのだった。

藪からスティックとレミイズワンダフル

ヘルメットを被った俺は六畳部屋の中央に移動した。
手にする携帯は立派に二本線を表示している。

耳にあてる受話部分からはプルルル…と小気味良い発信音が響いていた。

八度目のコールで斉藤部長の低い声が出た。

「もしもし、何だ」

「何だつてことはないでしょう、近藤です」

「それは分かっている」

「部長、着きましたよ、明金三丁目、メゾン・デ・孝明」

「ああ着いたのか、良かったな。直ぐに分かったか、メロン三丁目、めぞんデイコメ」

「メロンじゃなかったですよ、明金です」

「め…ろん、三丁目だろ」

「め…い…こ…ん、三丁目です」

「ふーん」

「何ですかその反応。メロンと明金、だいぶ違うじゃないですか」

「似たようなもんだろ、無事着いたのならいいだろう、メロン三丁目」

「だから…明…ま、無事着いて良かったですよ」

外回りでもしているのだろうか、相変わらず無責任な部長の声の後ろでは、時折車のエンジン音が響いていた。

「で、どうだ、めぞんデイコメは」

だからそれも違うって。「メゾン・デ・孝明」だと正そうかと思いい口を開きかけたが、繰り返し何度説明をしたところでこの斉藤部長の頭にはきちんとインプットされる事はないだろうと思い直し言葉を呑み込んだ。

「まあ、見た目はボロいですけど、中はまあまあですよ、メゾン・

デ・孝明」

「メゾン・デ・孝明？」

分かるのかいっ！！

明金三丁目を理解できない齊藤部長は、「メゾン・デ・孝明」の限りなく「めぞんディコメ」に近い方の言葉の誤りを理解できた。

「良く分かりましたね、メゾン・デ・孝明」

「お前が今そう言ったんだろうが」

「…明金三丁目」

「マロン三丁目がどうした」

「……」

何故そこは理解できない。しかも既に町名が変わっている。

「いえ。何でもありません」

「で、何号室だったんだ。加藤が気にしてたぞ」

「レ・ミゼラブル室です」

「レミ イズ ワンダフル？ 楽しそうな部屋だな」

「……」

やっぱり。

俺の想像は間違っていなかった。

「ああ、無情ですよ、レ・ミゼラブル」

「編む嬢、レミ イズ ワンダフル？ 何屋なんだ、そのレミって
いう女は」

「…それより部長、あれ被ってみました？」

「なんだ、あれって」

「ヘルメットですよ。摩訶不思議なヘルメット」

「ああ」

「被ったんですか」

「被るわけないだろう」

「…ですよね」

部長の声の奥ではエンジン音に加えて人ごみに溢れる足音が漏れてくる。

ただ豪雨の中、ポツンと一人狭いアパートに放り込まれた自分の現状を思い、ふいにその喧騒けんそうが懐かしく感じられた。

「賑やかですね、外回りですか」

「まあ、そんなところだ」

「こっちは酷い豪雨ですよ」

「そうみたいだな、さっきからお前の声と一緒にビタビタと何かが煩わづらいと思つてたところだ」

「ヘルメット売れました？」

「売れるわけないだろう」

「そんな自信たつぷりに言わないでもらえますか？ そつちで売れないヘルメットがこんなと田舎で売れるとも思つて俺を送りだし
たんですか」

「さあな」

「さあなつて」

「で、なんだ、用件は」

おそらく一服でも始めたのだろう、「よっこいしょ」と言う声と共にふうと息を吐く音がする。

直ぐ耳元で聞こえる部長の吐息が何となく気持ち悪く、思わず受話部分を数十センチ離してから再び耳元に当て次の言葉を切り出した。

「あのヘルメット、すごいんですよ」

「なんだ、藪やぶからスティックに」

「…何故、ルー語なんですか」

「流行つてるだろう、ルー語」

「まあ、そうですね」

「で、藪からスティックになんだ」

「俺、さっきヘルメット被つてみたんですよ」

「ほう」

「そしたらですね、大発見をしたんです」

「ほう」

「今俺、携帯から部長に電話してるんですけどね」

「それは分かっている」

「ええ。でも携帯の繋がるような場所じゃないんですよ、明金三丁目」

「そうなのか、マロン三丁目」

「マ…そうなんです、明金三丁目」

「ほう」

「でもですね、ヘルメットを被ったらですね、繋がったんですよ、携帯」

「意味が分からん」

「えーっとですね、明金三丁目に来たときには既に圏外だったんです」

「うむ」

「もちろん、レ・ミゼラブル室に入っても圏外でした」

「レミ イズ ワンダフルも圏外だったと」

「…そうですね。でも思いつきで…というかたまたまヘルメットを被って見たらですね、何故か電波が入ったんです。で、こうして斉藤部長に電話をかけることが出来てるんです」

「ほう」

「驚きませんか？」

「なんでだ？」

「なんでだって…圏外だったのが、ヘルメットのおかげで電波が入ったんですよ」

「ほう、それはすごい、最初からそう言え。回りくどくて分からん」
鈍い。鈍すぎる。斉藤部長が部長に成り得たことが不思議に感じられた。

「このヘルメット、脳なんて鍛えませんよね」

「当たり前だろう」

「だから自信たっぷり自社製品を否定しないでもらえますか。それを売りに来ている俺のことも考えてくださいよ」

「俺の命令じゃないからな」

「でしょうけどもね」

「で、なんだ」

鈍い。鈍すぎる。そこでもっと驚き、商品の売り出し法を考え直すべきだと何故思えない。

半ば呆れながら俺は斉藤部長に説明を開始した。

「このヘルメットですね、脳なんて鍛えませんから、そもそも商品のキャッチコピーを見直すべきなんです」

「うむ」

「そんなキャッチでこのヘンテコな被り物を持ち込んでも絶対売れませんからね」

「うむ」

「しかし何故か携帯の電波をキャッチする機能を備えているんです」

「うむ」

「びっくりでしょう」

「そうだな」

「脳を鍛える摩訶不思議なヘルメット、これは名前も付けなおしてす」

「うむ」

「電磁波の有効利用が何とかか何とか…これも少し手を加える必要がありますね」

「うむ」

分かっていないのか、斉藤部長は電話の向こうで一つつかい欠伸^{あくび}をかましている。

「部長も試してみてくださいよ。ヘルメット被って」

「しかしだな」

「なんですか」

「こっちは電波バリバリ入るからな、そんな検証、アイキャント、できない」

「なんでルー語なんですか、分かりにくい」

「流行ってるだろう、ルー語」

言われてみればそうだった。

都会でこのヘルメットの機能を試してみるのはなかなか難しい。そして田舎町でこそこのヘルメットの効果が期待できるというものだ。

「部長、加藤はどうしてるんですか」

「こつちで営業してるぞ」

「それも考え直すべきです、このヘルメットは田舎でこそ役に立ちます」

「話をリッスン、聞く限りではそうらしいな」

「社長はどこです？」

「さあ」

「さあつて。社長に言うてくださいよ、商品名とキャッチを一から考え直すべきだと」

「そうだな」

「ともすればこれは大発見、いや、大発明ですよ」

「そうだな」

一人興奮する俺を尻目に部長はやけに落ち着いている。

いや、落ち着いているというよりも何も考えていないに違いない。

どこで旨くルー語を使おうか、そんなことばかり頭に過ぎっているに違いない。

「必ず言うておいてくださいよ。売り方によっては絶対ヒット商品になります」

「ああ」

「なんだったら俺が立証済ですから、商品名とか色々考えますからとも言うておいてください」

「ああ、そうする」

「必ずですよ。こんな田舎に来た俺の苦労を無駄にしないでください」

「藪からステイック」

「使つとこじゃないですよ」

「気にいつてるんだ」

「…じゃ、そういうことで。また連絡しますから」
「分かった」

一抹の不安よりもかなりの不安を抱えながら俺は電話を切った。
指先にはピリピリと電気が流れている。

ヘルメットを被る頭は蒸し暑さのせいでモワモワと汗を掻いていた。
こめかみ部分から一筋の汗が流れ落ちてきた。

「次は加藤だな」

引越し荷物を送ってもらわねばならない。

だが蒸れた頭が気になって一度ヘルメットを外した。

何も無い部屋で俺の頭から昇る湯気だけが白く緩々（ゆるゆる）と
踊っていた。

加藤、お前もか

頭から昇る湯気が収まりかけた頃、俺はもう一度カポリとヘルメットを装着し加藤へ電話を入れた。

ベランダの窓に叩きつける雨の音はだいぶ弱まりかけていた。

灰色だったその色も一段階上の明るさを含んだ色に変わっている。

「もしもし？ 先輩すつか？」

加藤の陽気に高い声が六度目のコールの後に響いた。

「ああ俺だ。さつき無事に着いたよ」

「良かったすね。で、ちゃんと在ったんですか、メロン三丁目」

「在った。正確にはメロン三丁目じゃなかったんだけどな。め・い・こ・ん三丁目だった」

「めいこん三丁目」

「そうだ」

斉藤部長よりも理解が早い加藤にやや安心した。

「で、めぞんディコメは在ったんですか？」

「在った。正確にはめぞんディコメじゃなかったんだけどな。メゾン・デ・孝明だった」

「めぞんでこうめい？」

「そうだ」

「どんな字書くんすか」

「メゾン・デまではカタカナ、孝明は孝子の孝に、明るいって漢字だ」

「メゾン・デ・孝明」

「分かったか？」

「それ、間違ってますんよね」

「ああ、間違ってるいんだ」

「変な名前すね」

「ああ。馬鹿にされた感じだよ」

斉藤部長よりはきちんと物事を判断できる加藤にますます安堵した。

「荷物送って欲しいんだ。ホントに何も無くてな」

「任せてください。業者も手配済みですから」

「なかなか気が利くな」

「ええ。後は必要なものを言ってくれば送り出すだけですから。」

先輩、メモ取って聞けと俺に言っただけでしょう」

「ああ」

「一応、米と水はダンボール三箱分用意してありますから」

「…そうか、ありがとう」

やはり米と水は準備済みだったか。

見当違いの気もするが、今の俺の状況からして加藤の用意してくれた米と水はそれなりに有りがたかった。

「それより先輩、藪^{やぶ}からスティックですけど、今どこから電話かけてます？ 携帯ですよな？」

「……」

瞬間、斉藤部長の間抜け面が頭に浮かんだ。

「お前もか」

「え？」

「いや、何でもない。部屋からだ」

「部屋？ 可笑しいなあ、電波入ります？ 俺何度か先輩の携帯に電話したんっすよ。てんで繋がらないんで、どこかで事故ってるのかと思いましたよ」

「事故って」

「無事で良かったですけど」

「まあ、説明するとだな…」

俺は斉藤部長へ報告した通りのことを加藤へも説明した。

途中加藤は「へえ！」「マジっすか！」を連発し、俺の一言一言に感嘆の声を上げた。

斉藤部長の抑揚の無い声を聞いた後だった俺は、その大げさ過ぎる加藤の反応が嬉しかった。

「すごいだろ」

「やばいつすよ」

「だろ」

「俺も田舎町に行つて営業かけた方がいいっすね」

「ああ、そのほうがいい。時期に社長：部長からかもしれないが命令が下ると思うんだがな」

「そうですね、準備はしますよ」

「大変かもしれないけどな、田舎町に飛ばされるのは」

「いいんっすよ。俺、田舎に泊ろっ好きですから」

「一泊つてわけじゃないんだぞ」

「ああそうか」

大丈夫だろうか。やや心配したが加藤のこのノリならどこに飛ばされても旨くやっていけるだろう。

「じゃ、今言つた家電やら何やら、ちゃんとメモ取つたな？」

「はい、ちゃんとメモ取りました。これから直ぐに業者に積み込ませます」

「宜しく頼むぞ」

「任せてくださいっすよ」

張り切る加藤の声にそういえばと気がついた。ちゃんとした住所を教えていなかったのだ。

「加藤、俺住所まだ言つてなかったわ」

「あ。そうでしたね」

「県、」

「県」

「××市、」

「××市」

「明金三丁目、」

「めいこん三丁目：って、めいこんって平仮名っすか？」

「いや違う。明るいに金だ」

「明るいに菌：何だか汚いっすね」

「何が？」

「どんな菌っすか」

「明るいに金…金、金曜日かねの金だぞ」

「ああ、明るいに金曜日の金っすね」

「じゃなきゃ、めいこんとは言わないだろうが」

「そうっすね、あはは」

「…メゾン・デ・孝明、」

「メゾン・デ・孝明、ぶぶっ、何度聞いても笑えますね」

「次聞いて更に笑うなよ」

「なんすか」

「部屋名だ」

俺の言葉に期待を隠せない加藤の様子が受話の向こうから伝わってくる。

「何号室っすか？」

「レ・ミゼラブル室だ」

「は？」

「レ・ミゼラブル」

「レミ イズ ワンダフル？ なんっすかそれ。ぶぶっ。楽しそうですね」

お前もか。

ため息をつき俯く頭の中から冷たい汗が頬を伝って携帯を濡らした。

「レ、中黒」

「レ、中黒」

「ミ、ゼ、ラ、ブ、ル、だ」

「ミゼラブル…っ。レ・ミゼラブル？ なんっすか、それ。ぶぶー」

「笑うな、俺は泣きたい」

「分かりました。これで無事に荷物送れます。明日には着くようにしますから」

「ああ、頼むよ」

「了解つす」

荷物は明日か。

今日はやっぱりカップ麺丸かじりの夕食か。

そんなことを考えながら電話を切った。

窓を打つ風も弱まっていた。

そつとベランダの窓を開けてみる。

斜め前に横たわるとぶのような池はますます濁り、蓮の葉の上に特^{はす}大級のガマカエルが座り込んで二階の俺を見ていた。

しばらくゴロゴロと喉元を震わしじつと俺を見ていたが、飽いたのか一つベロンと瞬きをすると重そうな身体をひねって濁った水へと消えていった。

腕時計を見ると四時半を指していた。

窓を閉め部屋に振り返ると同時に、壁にかかった内線電話から「コンシエルジュです、コンシエルジュです」と肉声が聞こえてきた。ビビツたが、それがコール音だということに数秒後気づいた。

「これも肉声か」

俺はおそろおそろ「コンシエルジュです、コンシエルジュです」と繰り返す白い内線用電話の前まで進み、そつと受話器を持ち上げたのだった。

お茶でも飲みませんか

「はい、近藤です」

「あ、もしもし？ 近藤さん？ コンシエルジュですけども」

「管理…内藤さんですか？」

「ええ、コンシエルジュです」

受話器の向こうで微妙に高い内藤コンシエルジュの声が響いていた。どうしても管理人と呼ばせない、そんな内藤コンシエルジュの意気込みに少々感心しつつあった俺は素直にコンシエルジュと呼ぶことにした。

「どうしました、コンシエルジュさん」

「いやいや、特に用はないんですけどね。落ち着いたら連絡くださいって言うってから数時間経ってますんで、どうしてるか気になって」

「そうですか、わざわざすみません、気にかけてもらって」

「いえいえ。倒れてたりしたら私が困りますからね」

「…そうですね」

「で、落ち着きました？」

落ち着くも何も、引越し荷物を整理しているわけでは無かったし、手を揉んでいたと言えばヘルメットの意外な効果に右往左往していたくらいなので、別に「まだ落ち着いてません」などと返事をする必要も無かった。

「ええ、落ち着きました」

「近藤さん、引越し荷物も何もまだ来てないみたいですけど、どうされたんですか？」

「なんていうか、斉藤部長の手違いで、明日になるんです、大きな荷物は」

「そうなんですか。それはそれはお気の毒に」

「気の毒、ですかね」

「じゃあ、必要な物全てが、今日はな〜んにも無いって事ですよ」

「そうですね、なぐんにもありませんね」

「レ・ミゼラブル」

「…そんな感じですかね」

「近藤さん、どうです？ お茶でも飲みに来ませんか、私の部屋まで」

何だろう、軽く馬鹿にされてる感じが非常にするのだが、コンシエルジュの微妙な言葉回しに旨く反抗することすら出来なかった。

完全に頭に来る前に巧妙に話をずらされる感がある。なかなかの腕前だ。

なんて感心しているとコンシエルジュは更に続けた。

「今夜のご飯も無い状態でしょう？」

「カップ麺は持参してるんですけども」

「お湯、沸かせないでしょう、やかんとか無いですもんね」

「ええ、困ってるんです」

「乾燥麺、丸かじりでもしようかと考えてたんじゃないですか？」

「良くご存知で」

「何でもお見通しですよ」

「え？」

「って言ったら気味悪いですよ。カップ麺と聞いて、そうなんじゃないかと思っただけです」

「…そうですか」

「ま、とにかくお茶でも飲みに降りて来てください」

「ええ、これから伺います」

何だか嬉しそうに笑ったコンシエルジュは「お待ちしています」と言ってから電話を切った。

ヘルメットを被ったままだったことに気づいた俺は頭からヘルメットを外し、軽く髪を整えてから自室を後にし、コンシエルジュの部屋へ向かったのだった。

部屋を出ると、赤い錆びた郵便受けに紙切れが挟まっていた。

訝りそれを手にすると『灯流さん感想ありがとう！ 水沢』とボールペンで綴られていた。

「なんだ？」

俺は灯流さんでは無い。以前のこの部屋の主か。良く分からん。ますますこのアパートの実態が分からなくなっていた。

一階へ繋がる階段は雨に濡れてびたびたに濡れていた。

赤錆が覆うその階段の隅には、一段毎に青蛙がひっそりと座っていた。

最後の一段の隅に目をやると、そこには蛙ではなくザリガニが陣取っていた。

久々というよりも、都会で生まれ育った俺は生のザリガニなんてちゃんと見たことがなかった。

ハサミを持ち上げながら俺を威嚇するその姿に、初めエビか何かだと思っ**て**びびったが、教科書に描かれていたザリガニの写真を思い出し、それがそうであると理解するまでに時間はかからなかった。

「普通にザリガニって出沒するんだな」

まだ威嚇を続けるザリガニの横を通り過ぎ、内藤コンシェルジュの部屋の扉の前に立つ。

すっかり小雨になった雨は、緩い風に吹かれて俺の顔をさわさわと撫でていた。

崖を下る雨は落ち着き、その上の木々も今では活き活きとその緑を広げている。

土から昇るミミズの匂いは程よい土の匂い**に**変わっており、夏草の香りと共に俺の鼻をくすぐった。

ちょっといい気分になりながらコンシェルジュ部屋の呼び鈴を押した。

「ボンジュール！ ボンジュール！」

「……」

忘れてた。

この肉声を。

いい気分はすっかりどこかへ吹き飛び、目の前は瞬時に内藤コンシエルジュの揺れる腹の幻影げんえいでいっぱいになった。

「はいはい、近藤さんですか？」

「そうです、近藤です」

「早かったですね」

「二階からですからね」

早いのは当たり前だろう。そう突っ込みたい気分を抑え扉が開くのをしばし待った。

「ボンジュール！」

「…どうも」

何故ボンジュールなのか。

呼び鈴の音といい、内線電話の呼び出し音といい、このコンシエルジュの挨拶といい、先ほどから何度この「ボンジュール」を耳にしていることか。

ここがフランスでは無いだけに、その違和感は大きくなる一方だった。

「お待ちしてましたよ、ささ、どうぞお上がりください」

「失礼します」

「狭いですけどね」

同じアパートに住まっているのだ、狭いのはお前の部屋も俺の部屋も変わらないだろうが。

突っ込みどころは数あれど、それをさせないコンシエルジュの変な存在感にやや圧倒されつつ部屋に上がりこんだ。

「お邪魔します」

玄関を入ると台所が広がる。

その向こうに六畳部屋が見える。

俺の部屋と全く同じ作りであることは間違いなかった。

「今お茶入れますからね、その座布団の上に座っていてください」

「はい、すみません」

内藤コンシエルジュは軽く微笑むと、狭い台所のやかんの口を開き、

湯気の昇り具合を確かめてから急須にお湯を注ぎ始めた。

俺は通された六畳部屋をぐるりと見渡した。

尻の下に引かれた座布団は紺色でふかふかの綿が詰め込まれており、明らかに客用ではあったがそれが使われたであろう回数是非常に低いことを物語っていた。

コンシェルジュの部屋ということもあって、どんなにおフランス風なのだろうと半分期待して入ってみたのだが、残りの半分のどうせバリバリに日本風に違いないという諦めのほうが勝った部屋であった。

天井を走る壁には観光地土産のちようちんがずらりと並び、目の前にあるテーブルは丸いちゃぶ台、壁に添えられている茶箆ちゃだんす筥はつやつやとした木目が美しすぎる純日本風のものであった。

「ん？」

良く見ると茶箆筥の上には東京タワーの置物がぼつりと立てられていた。

その隣にはそれよりも少し背の高いエッフェル塔の置物が立っている。

茶箆筥の中に目を凝らすと、フランス国旗のペイントが施されたコーヒークップとソーサーのセットが二組並べられていた。

「ささ、お茶入りましたよ」

たぶたと腹を揺らしながらコンシェルジュがお茶の入った湯のみを俺に差し出した。

「あ、どうもすみません」

「いえいえ、なんのお構いもできませんで」

「いただきます」

「熱いですから気をつけてくださいね」

言いながらコンシェルジュが俺の向かいに腰を下ろす。

タンクトップから少しはみ出した腹に噴出しそうになった俺は、湯飲みに息を吹きかける風を装い、思わず漏れそうな笑いを誤魔化した。

「荷物は明日着でしたっけ？」

「ええ、そうなんです」

俺と内藤コンシエルジュは向かい合ったままひたすらお茶を啜^{すす}っていた。

「おかわりどうですか？」

「あ、いただきます」

「お茶っぱ交換しますね」

茶菓子一つ出てこない内藤コンシエルジュの気の利かなさに内心うんざりしていた。

「近藤さん」

「はい？」

「なんでお茶菓子の一つも出てこないんだろっとか考えていませんでした？」

「へ？」

何でだ、何故分かる？

「私だったらそう思いますからね。お茶飲みに来ませんかと言っておいて本当にお茶だけかってね」

「は、はは」

「出さないわけじゃないですよ、冷やしてるんです」

「冷やす…？」

内藤コンシエルジュは立ち上がると流しへ向かって冷蔵庫のドアを開けた。

今更気づいたのだが、そこにある冷蔵庫はこの狭い部屋に似つかわしくないほどデカイ。

もはや業務用サイズはあろうかというその冷蔵庫をパタンとしめると、「上出来上出来」と上機嫌のコンシエルジュが取り皿と共にそれを手にして六畳部屋へ戻ってきた。

「シュー・ア・ラ・クレーム シュルブプレ？」

「シュー…アラ？ クレーム？」

クレームという言葉の響きに営業という立場上異常に敏感になっている俺は瞬時身構えた。

「シュー・ア・ラ・クレーム。シュークリームです、どうですか？
甘いのお嫌いですか？」

「シュークリーム…」

「シュー・ア・ラ・クレームです。シュークリームという言葉は本来存在しません」

「はあ」

「シュー・ア・ラ・クレーム。フランス生まれの立派なお菓子です。シューとはキャベツのこと。ボコボコツと膨らんで焼けた形がキャベツに似ているところからこの名前が付いたんです。

もともとは何か他の料理を作った時に余った生地を捨てるのがもったいないので焼いてみたらできちゃったなんて説もあります」

「…お詳しいんですね」

「そうですね、常識かと思ってました」

「…そうですか」

「甘いのお嫌いですか？」

「いえ、大好きです」

「それは良かった。たくさん焼いたのでいっぱい食べてってくださいね」

「これ、内藤さんが作ったんですか？」

「ええ、好きなんですよ料理。特にフランス菓子作り」

「へえ…」

俺はもう一度内藤コンシェルジュの姿をマジマジと眺めた。

タンクトップにハーフパンツ。

このオヤジがこの繊細なシュー・ア・ラ・クレームを作ったのか…
俄かには信じ難かったが、流しに散乱する強力粉やふるいなどを目にするとその疑問は静かに引いていった。

「日本茶にシュー・ア・ラ・クレーム、これがぴったりなんですよ」
「そうなんですか」

「と、私が思っているだけですけどね」

「…いただきます」

一つを手にし、そつと口をつけると、中からトロリとしたクリームが舌先に絡みついた。

それは驚くほど繊細で美味で芳醇で…なんとも例えようの無い、まさに初めて口にする最高のシュークリームだった。

「これ、すつごく美味いです。すごいです、このシュークリーム」

「シュー・ア・ラ・クレームです」

「このシュー・ア・ラ・クレーム、すごく美味しいです」

「お口に合いますか？ それは良かった」

「今晚はこれでしのげそうです」

「それも良かった。私も夕食は殆どフランス菓子なんですよ」

「へ？」

「フランス菓子好きが災いしてって言いますかね、こんなお腹になつてしまつて」

はははと笑う内藤コンシエルジュの腹が揺れる。

毎晩、こんなに大量の甘いものを食っているのか。

それでその腹なら納得できる。

俺はシュー・ア・ラ・クレームをこれでもかというくらい遠慮なく腹に押し込んだ。

「ご馳走様でした」

「いえいえ。こんなに食べていただけて嬉しい限りです」

口の周りに付いたクリームをハンカチで拭い、俺はコンシエルジュに頭を下げた。

「荷物が明日つてことは、明日から本格的なここでの生活が始まるつてことですね」

「ええ、そうですね。あ、そうだ、引越しのご挨拶もちゃんとしませんで…すみません。何せご挨拶用と思っていた品々なんかもあつちに残してきてしまったもので」

「そんなのいいですよ、近藤さん」

「そういつわけにはいきませんよ」

「それもそうですね」

「……ここは……このアパートは内藤さん以外に四人いらっしやるんですか？」

「ええ、各部屋にいらっしやいます」

「その方達にもきちん^と挨拶しないと」

「そうですね」

そうなのだ。

引越しの挨拶にと思って準備していたタオルがあつたのだが、それもこれも全部東京に残してきてしまった。

挨拶回りは明日にするしかない。

俺も抜けてるな、と頭をかくより仕方なかった。

「ここの住人は皆親切ですよ」

「そうですね」

「ええ、楽しい方ばかりです」

「それは良かった」

「ところで近藤さん」

「はい？」

「今日はもう夜ですから明日にでも改めて説明しますけどもね、このアパートには色んな規則がありましてね」

「規則ですか？」

「ええ、そんなところです。規則っていう規則でも無いんですけどもね、決まり事といえますかね」

「決まり事」

「コミュニケーションの一つとも思っていてください」

「はあ」

何だろう。

ゴミだしのルールとか、何時以降は洗濯機を回さないだとか、朝はちゃんと挨拶するだとか、そんなものだろうか。

その時の俺は、常識に則^{のっと}った規則を考えていただけだった。

後にそれはとんでもない規則：回覧板ということだと判明するのだが、シュー・ア・ラ・クレームを内藤コンシエルジュと向かい合って食したこの日にはてんで見当が付かなかった。

「もう一杯いかがですか？」

「いえ、もう結構です。ご馳走さまです」

「そうですか。私はあと一杯くらい飲みたい気分なんですけど」

「あ、じゃあ、俺もいただきます」

「無理してませんか？」

「…してません。むしろ飲みたいなと思ひ直したところです」

「良かった」

やかんからジョロジョロと急須にお湯が注がれる。

その湯気の立つ注ぎ口を見つめる視線の向こうに微妙にくくつと揺れるコンシエルジュの腹が小刻みな運動を繰り返していた。

このコンシエルジュ、侮あなとれない。

そう感じながら再び入れられた日本茶をかばかばと音を立てる己の腹に注ぎ込んだ引越し初日の夜だった。

引越し屋の正体

散々日本茶をお代わりさせられた俺は「では、また明日伺います。おやすみなさい」とコンシエルジュに頭を下げ部屋を後にした。

二階へ続く階段には蛙の姿もザリガニの威嚇するハサミも見当たらなかった。

時計の針は七時を回っていた。

なんだかんだと内藤コンシエルジュ部屋に三時間以上も居たことになる。

日本茶の飲みすぎで腹がかぼと音を立てているのも納得だった。階段を上りながら空を見上げると、すみれ色の夜空に半月が白かった。

月光は真っ直ぐに俺の頭に落ち、そして辺りを同じ色に染めていた。耳を澄ますと池の方から「げーこげーこ」と野太い声がする。

雨の中俺をじっと見上げていたガマカエルに違いない、そんなことを考えながら自室の扉の前に立った。

郵便受けにはまた何かが挟まっていた。

「新聞いかがですか？　また訪問いたします。SHIE」のメモと、

「もうすぐ花火大会！　是非ご参加ください！蓮香」のメモだった。

「新聞：花火大会……」

そつとメモをポケットに収め、「レ・ミゼラブル」と迎える黒いドアを開き部屋に入った。

「七時かい　寝るには早いが　何も無い」

思わず漏れた五・七・五に自分で呆れた。

テレビもラジオも何も無い。

あるのはヘルメットだけだ。

ため息をつき、流しの蛇口をひねった。

一瞬こぼつと音を立てた蛇口ではあったが、次の瞬間にはドドーっ
と勢い良く水が流れ出した。

ほつとした。水道は通っている。

べたべたの身体を洗い流したかった。

そのまま風呂場のドアを開け、俺はシャワーを浴びた。

カルキ臭さの欠片かけらも無い、田舎の水に感動した。

すつきりした俺はやることも無かったのでヘルメット磨きなどをしながら時間を潰した。

何だかんだと言って身体は疲れていたのだろう。

布団も何も無かったが六畳部屋でゴロゴロとしていた俺はいつの間
にやら眠ってしまったらしい。

気づいた時にはベランダの窓から燦々（さんさん）と朝日が射し込んでいた。

その眩しさに目を覚ました俺は窓を開け、半ば腐りかかっているベ
ランダに素足で降り立ち、不細工に水色に塗られた柵に手をかけ外
の空気を肺一杯に吸い込んだ。

「うまい」

空気がこの上なく旨かった。

朝露に濡れた緑の稲が太陽の光に輝いている。

その間を縫うように白鷺しろさぎが長い羽をゆつくりと動かし飛んでいた。

「悪くない」

明金三丁目の朝は気持ちのいいものだった。

左右に伸びる一本道を右から左に視線を動かすと、ずっと向こうに
青い軽トラがこちらに向かってガタガタと近づいていた。

荷台には幌ほろが掛けられ、酷く揺れており、その隙間から何やら見覚え
のある生地が見え隠れしていた。

「あれ？」

近づいてくる軽トラックが次第に鮮明になって目に入る。

「間違いない、俺の抱き枕だ」

荷台からベロンとはみ出したそれは俺が五年以上愛用している抱き
枕だった。

「なんだ、何で俺の抱き枕がはみ出てるんだ」

いや、訝るのはそこじゃなかった。目を凝らすと見覚えのある顔が二つ。

「まさか」

運転席に若い男、助手席に口を半開きにし爆睡するオヤジ。

二人とも頭には黄色の何かが乗っかっていた。

「おい…」

俺は慌てて部屋に戻り、ヘルメットを装着した。しっかりと立つ二本線。

加藤の番号を表示させ、即効でボタンを押した。

そのままベランダへ戻り、再び軽トラックを見守る。

急ブレーキを掛けた軽トラックがガコンと揺れ、はみ出した抱き枕がベロンと回転した。

助手席側のオヤジがフロントガラスに頭をぶつけ、何やらわめいている。

「もしもし？先輩っすか？」

携帯の奥から加藤の高い声がする。

軽トラックの運転手をみるとやはり携帯を耳に当て口を動かしていた。

「お前か？」

「先輩、何っすか、お前かって。お前かイコール加藤か？って意味っすか？そうです、加藤です」

「どうしたんだ？」

「自分で掛けておいてどうしたんだって事はないでしょう、それは俺のセリフっすよ」

「それもそうだ、すまん。…いや、そうじゃなくて」

「そうじゃなくて？」

「こっちだ、こっち」

「こっち？」

「そのまま斜め右前方のアパートを見る」

「斜め右前方？…あ！」

「やっぱりお前か」

「いやゝゝ先輩！　こんな朝っぱらからお出迎えですか！　嬉しいなあ」

窓から身乗り出す男がぶんぶんと手を振っている。

頭の上の黄色：もはやヘルメットには違いなかったが、その頂上の銀色の触覚が陽光に反射し俺の目を攻撃した。

運転する男は案の定加藤だった。

その隣で額を^{ひたい}フロントガラスにピタリとくっつけてオヤジがこちらを凝視している。

「斉藤部長か」

「俺っすよ、加藤ですよ」

「いや、そうじゃなくて隣り」

「ああ、そうです、部長です、代わりますか？」

「いや、いい」

「しかし何してるんっすか先輩、トランクス一丁にヘルメット被って。超ウケるんっすけど！」

ぶぶぶつと吹き出す加藤の隣りで斉藤部長も腹を抱えていた。

俺は自分の姿を見下ろした。言われてみれば何だこの格好は。変体が越してきたと思われても仕方のない、中途半端なお笑い芸人ではないか。

いやいや、それよりも触覚付きヘルメットを被り青い軽トラックに腰を下ろすお前らもなかなかのもんだぞ。

どの辺りからその格好で運転してきたのだ。

「何でお前と部長が居るんだ」

「何でって引越し荷物を運んで来たんっすよ」

「は？」

「夜通しで」

「何でお前が」

「ちよつと色々ありまして。で、先輩そこにヘルメット被ってそんな格好でいるって事はそこが先輩の部屋っすね」

「ここにヘルメット被ってこんな格好にいるからここが俺の部屋ってわけでは無いぞ」

「ぶっ！ オモロイっすね、先輩」

「いいから静かにこっちに向かってこい。分かったな」

「了解っす！」

そう言うのと軽トラックは再び動き出した。

メゾン・デ・孝明の前に止まった軽トラックから加藤がブンブンと手を振っている。

俺は「しーっ！」と唇に指を当て、加藤の高い声上がる前にそれを阻止した。

「とにかく静かに上がって来い」と小声で加藤の頭に声を掛けると「うんうん」と頷いた加藤が降りてきた。

その後に続いて「よっこらせ」と斉藤部長が降りてきた。

そんな様子を例のガマカエルがやはり蓮の葉に乗っかり、じっと見つめていた。

斉・近・加、揃っちゃいました その1

俺は急いで玄関の扉を開けた。

音を出さないように慎重に階段を踏みしめる加藤に続いて、何も考えずドスドスと上がってくる斉藤部長の順でまもなく二階の踊り場に到着するところだった。

二人ともしつかりとスーツ姿だった。

事務所でいつも見ていた姿に変わりなかった。

ただし、頭にしっかりと装着する黄色の…それも触覚付きのヘルメットが乗っていることを除いてはだが。

踊り場に付き、ドアから顔を覗かせる俺に気づいた加藤の顔が一瞬ほころぶ。

上がった口角が開こうかというその顔の動きを見て取った俺は、慌てて「しーっ！」と人指し指を唇に押し当てた。

やや小走りに加藤が玄関に滑り込んできた。

頭だけをつ込み、部屋の中を確認するようにしてから斉藤部長がそれに続いた。

何も無い六畳部屋に、斉藤、近藤、加藤の「再婚か！」コンビが揃った。

この光景を何も知らない人物が突然訪ねてきたとしたら、一体どう思うのだろう。

スーツ姿にパンツ一丁の男が三人。それならまだいい。

しかし三人が三人とも触覚付きヘルメットをしっかりと装着している。

何の儀式だ。

それともただのアホか。

「レミはどこだ？」

先ほどから落ち着き無くキョロキョロと部屋中を見渡していた斉藤部長の第一声はそれだった。

「そんな人、居ませんよ」

まだ理解できていないのか。呆れる俺を前にして斉藤部長は尚も続けた。

「じゃあ、編む嬢、レミ イズ ワンダフルはどこだ？」

「…部長の言うさっきのレミと、今の編む嬢、レミ イズ ワンダフルはきつと同一人物のことです」

「そうなのか」

「いや、分かりませんが、おそらく。そもそもレミなんて最初から存在しません」

「いや、居る。お前が電話で言っただろう」

「部長が作ったんですよ、編む嬢、レミ イズ ワンダフル」

「お前が居ると言っただ、編む嬢、レミ イズ ワンダフル」

「そんなこと、一言も言ってませんよ」

「いや、言った」

「言ってません」

「いや、言った」

「言ってませんって」

「^{かくま}匿ってるのか」

「何で俺がレミを^{かくま}匿う必要があるんですか」

「やっぱり、居るんだろう」

「だから居ませんって」

「逃げたか」

「…そうかもしれません」

どうしてもレミを諦めきれない斉藤部長に根負けし、否定することを諦めた。

「どんな女ですか、そのレミっていう人」

ベランダから外を覗いたり、隣の三畳部屋を歩き回ったりしていた加藤が興味深そうに俺と部長の会話に混じってきた。

「…お前もか」

「へ？」

「いや、いいんだ。何処かへ行ったらしい」

「へえ。先輩が越してきたからですかね」

「…そうかもな」

「戻ってきたら紹介してくださいね、先輩」

「…ああ。あくまでも、戻ってきたら…の話だけだな。そしたら俺も会ってみたいよ」

加藤の代わりに強く首を上下し、^{うなず}頷く齊藤部長の広い額に陽光が照かっていた。

斉・近・加、揃っちゃいました その2

「ところで」

ひとしきり存在しないレミの話を交わした後で、俺はレ・ミゼラブル室に「再婚か！」トリオが何故か揃ってしまっているこの状況の確認を始めた。

「加藤、どうしてお前が俺の引越し荷物を運んで来たんだ、しかもこんな早朝に」

「俺もだぞ」

間を居れず斉藤部長が口を挟んだ。

「…見れば分かります。どうして二人して引越し屋の真似事をするんですか。俺の抱き枕なんて既に落下寸前じゃないですか」

いや違った。抱き枕優先で話をするつもりは無い。俺は言葉を選びなおし話を続けようとした。

「レミは…」

「居ませんよ」

レミの話を振り返そうとする斉藤部長の言葉をあつさりとは否定することに成功した俺は、加藤に向き直り再度確かめた。

「加藤、業者はどうした？ 何でお前が運んできたんだ？」

「いや、確かに業者は手配したんっすよ」

「…斉藤部長のことか？」

「そんなわけないでしょう、先輩も変なこといいますね、あはは」

「…お前に電話したとき、これから業者に積み込みさせますからって言ったよな」

「ええ言いました。その予定だったんですよ」

「予定？」

「ええ。それがですね、在りえないことが起きたんです」

「在りえないこと？」

「ええ。引越し屋が来るはずが、何故か来たのが宅配業者だったん

です」

「は？」

「こんな荷物は引越し屋に頼んでください、なんて言いやがるんで、頭に来て帰したんっすよ」

「…加藤」

「はい」

「手配したのはお前だよな」

「ええ」

「で、来たのは宅配業者だったと」

「そうなんっすよ、びっくりしましたよ」

「…俺がびっくりだ」

「先輩もですか！　ですよね」

「…加藤」

「はい」

「悪いのは誰だ」

「…すみません、…俺です」

呆れてそれ以上口を開けなかった。

引越し作業するのに宅配業者を手配するとは。

「しかし…」

俺はそこで考えた。

幾らなんでも馬鹿過ぎる。

加藤がこれほどまで馬鹿だったとは思えない。

抜けてる部分は多々あれど、あれだけ「任せてください」と言い、米と水までしっかりと三箱分準備してくれていた加藤がここまでアホなミスを犯せるとは考え難かった。

そして「俺です」と続けるまでにやや間があったことに何となく引っかかった。

「加藤…」

「はい、先輩」

「お前が引越し屋…結果的に宅配業者を手配したのは分かった」

「はい、先輩」

「なにで調べた？ 黄色い表紙のあれか」

「いえ」

「まさかとは思うが」

「たぶん合ってると思います」

「やっぱり」

「ええ。俺もちゃんと事前にチェックしとくべきだったと。CMでも言ってますし」

「聞いたのは？」

「電話番号だけでした。その詰めが甘かったです、すみません」

「で、僅^{わず}かばかり責任を感じて…」

「ついて来たんです。先輩には言うなと言われたんですが」

次第に小声になる加藤の顔を見つめた後、一つため息をつき俺はゆつくりと後ろを振り返った。

腐りかかったベランダのささくれに引っかかったのだろう、無理に引っ張ってゴム部分がくるぶしまですり下がった黒い靴下をびろんと伸ばしながら、尚もささくれと格闘する斉藤部長。

ついにささくれに負けた部長の左足から伸びきった靴下がスポンと抜け、そのまま後ろに尻餅^{かぶ}をついた被^かり主のヘルメットが水色の柵にゴツリと鈍い音を立てた。

「…平和だな」

「そうっすね」

そのまま座り込み、靴下をささくれから引き剥がしにかかった部長のヘルメットの触覚が光っている。

その向こうに青々と連なる木々をバックに、触覚は殊更^{いっそう}銀色が際立っていた。

羽を休めるため、カラスが木のとっぺんに降り立った。

斉藤部長越しに見えるその姿は、ちょうど触覚のとっぺんでもあった。

その場所で「バカァー、バカァー」と繰り返すカラスに、「何てし

つくりとくる光景なんだ……」と漏^もれた自分の言葉は間違っていない
と思うことにした。

齊・近・加、揃っちゃいました その2（後書き）

斉・近・加、揃っちゃいました その3

斉藤部長の靴下がささくれから無事引つ剥がされると、触覚のてっぺんに見えるカラスも朝日に煙る空の向こうに飛んでいった。

山の上に顔を出す太陽は、斜めからその光を六畳部屋に注ぎ込んでいる。

引越し荷物をガタガタと運び込むにはまだ早すぎる時間帯だった。

こんな朝っぱらから階段の昇り降りを繰り返していたら、アパートの住人と挨拶を交わす前から嫌われるはめに成りかねない。

とりあえず太陽が山の上からすっかりと顔を出し、部屋に伸びる影が程よく短くなってから運搬作業を開始することにした。

それまでの時間、俺たち三人は六畳部屋の中央に互いに腰を下ろし、加藤が買ってきた缶コーヒを啜りながら時間を過ごした。

何故スーツ姿なのかと加藤に尋ねたら、斉藤部長がトイレに力み^{りき}に行ってる隙を狙って俺の耳元で囁いた。

「仕事で来たということにしとけて言うんで」

「仕事？」

「ええ、ヘルメットの効果が本物かどうかちゃんと確認するためって」

「そうか」

「実際、部長が先輩からヘルメットの話聞いて、それを社長…っていつか社長つてどこにいるんすかね。ま、それはいいんですけど、社長からも確認してこいって言われたみたいですよ」

「そうか、社長にはちゃんと話したんだな。それは良かった。で、お前までもがどうしてスーツ姿なんだ」

「部長に言われたんですよ。俺だけスーツっていうのも変だろうって」

「巻き添えをくったわけか」

「ええ。でも俺はちゃんと着替えを持ってきたんで大丈夫です。部

「長は手ぶらで来ましたけどね」

「だらうな」

責任を僅かばかり感じていたとしても、部長が進んで引越し作業を手伝うようなことは無いだろうと思っていたので、その辺は特に気にも留めなかった。

晴れ晴れとした顔つきで部長が部屋に戻ってきた。

その顔を見つめながら、部長が俺と加藤の向かいに腰を下ろすのを確認してから話を切り出した。

「部長、社長は何て言っていました？　摩訶不思議なヘルメットについて」

慢性のぢが痛むのだろう、畳に押し付けたケツを揺らしながら部長が口を開いた。

「座布団は無いのか」

「見れば分かるでしょう、何も無いんですよ、まだこの部屋は」

「あれ持ってくるかな、あの荷台からはみ出した変な模様の長い何か」

「それ、俺の抱き枕ですよ。それだけは止めてください。っていうかその話じゃなくて、ヘルメットですよ、社長は何て言っていたんですか」

「ああ、とにかくそれが本当かどうか確認して来いとな」

「それからネーミングとか諸々のことを考え直すってことですか」

「そうなるだらうな。全てはそれからだ」

「じゃ、まだヘルメットを売り歩くことはしないほうがいいってことですよ。ま、脳を鍛える摩訶不思議なヘルメットとして売り歩いたって当然売れないでしょうし」

「そうだな」

三人ともまだヘルメットを装着したままだった。

俺と部長の話を隣りで聞きながら携帯をいじっていた加藤が感心した顔つきで俺にそれを見せてきた。

「先輩、すごいっすね。ほら、俺の携帯もちゃんと線が立ってます」

「ああ」

「いつ先輩から電話が来てもいいように、向こうの先輩の部屋を出るときから被ってきたんですよ。首都高とか走ってる時なんか、隣りの運転手とか物欲しそうな顔して俺たちを見てましたよ」

「それは別の意味で見てたと思うけどな」

出るときから二人して被ってきたのか…さすが部長と加藤だと改めて感心した。

その隣りで斉藤部長も己の携帯を開いていた。覗き込むとその古すぎる携帯も電波状況は良好であることを示していた。

「でも先輩、俺の携帯、ずっと線立ってますよ」

「…あたりまえだろう。ずっとその格好できたんなら。ヘルメットを外してみろ」

俺の言葉に加藤が「そっか」と呟いてからヘルメットを脱いだ。

それを見ていた部長もヘルメットを外した。薄い髪は汗で立ち上がり、年をとったキューピーはきつとこんなだろうという姿に見えた。

「おお！ 本当に圏外だ」

大袈裟に驚く加藤がもう一度ヘルメットを被りなおす。「おお！ 入った！」とまた大袈裟に驚きながら何回かその作業を繰り返した。部長もヘルメットを被りなおした。その顔には少しばかりの驚嘆が映っていたが直ぐにいつもの無表情へと変わっていた。

「ね、部長、俺の言ったことは本当でしょう？」

「ああ本当だ」

「これでちゃんと社長に報告できますよね」

「そうだな」

「ちゃんと報告してくださいよ」

「ケツが痛くて叶わん」

「…聞いているんですか、人の話を」

「聞いている。ケツが痛いんだ」

「それは分かりました。もうすぐ日が高くなりますからそれまで少し辛抱してください」

「オーライ。つまり分かった」

「またですか」

「何が？」

「いえ、なんでもありません」

部長の中途半端なルー語を聞きながらしばしの時間を過ごした。

時計の針が九時を示す頃、俺たちは立ち上がり、荷物の運び込みを開始したのだった。

齊・近・加、揃っちゃいましたその1・2・3は、後日「齊・近・加、揃っちゃいました」にまとめさせていただきます。

カレー、カレー、そして加齢

軽トラックに積み込まれた俺の荷物はさほどの量では無かった。

向こうを出るときに必要なものとそうでないものの分別はきつちりと済ませていたのだ。

一生この町に住むわけでは無い。

ので、極力必要分だけを移動させることにした俺の荷物は、三人掛かりで運んだこともあって三時間程度の作業で無事部屋へ運び込まれた。

ちつばけな冷蔵庫にレンジ、ブリキにタヌキに洗濯機…もとい、電気釜にテレビに洗濯機といった家電類はその程度で、後は適当な着替えに家庭用品、一応こたつ兼テーブルに、加藤の用意した水と米のダンボール、布団一組、そして忘れちゃならない大事な抱き枕：そんなもんで狭い六畳部屋は部屋らしい部屋となった。

階段の上り下りの途中、コンシェルジュと顔を合わせた俺は、「しばらくの間、バタバタと騒がしいと思いますことわりがすみません」と理を入れた。「暑い中、ご苦勞様です」とにこやかに腹を震わせたコンシェルジュから麦茶の差し入れを一度頂いた。

部長がコンシェルジュに挨拶をすると、誘われるままにその部屋へ消えていった。

そのまましばらく戻ってこなかったので、実質荷物は俺と加藤とで運んだようなものだった。

コンシェルジュとは顔を合わせたけど、不思議なことに他の住人と出くわすことは無かった。

それどころか、ガタガタと騒がしい俺の部屋周りを除いては、他の各部屋は妙にしんと静まり返っており、人の出てくる気配さえ感じられなかった。

ブルーのカーテンをベランダに取り付け、「ふー」と一息ついたと

ころである程度部屋の中も整理がついた。

「よし。住める部屋になった」

「良かったっすね」

「ああ、夜通し運んできたからお前も疲れたろう、ご苦労さんだな、加藤」

「ぜんぜんつすよ。そもそも俺の確認不足ですから」

「いや、そもそもは部長せいだろう」

「そうなんですけどね」

「夜通し運転してきたのもお前だろう、どうせ部長は眠りっぱなしだったんだろうし」

「隣りで大イビキでした」

「だらうな」

「イビキは煩いし、歯ぎしりは酷い^{ひど}し、拳句のはてに鼻の曲がるような^{もた}凭れた屁はするし最悪でしたよ」

「酷い^{ひど}な」

「加齢臭もするし。しかもホントにカレーっぽい匂いなんつすよ」

「…どんな加齢臭だ、それ」

「寝言もいっぱい言っていました」

「どんな？」

「隣りの客はよく柿食う客だ、とか」

「…なんだそれ」

「赤巻き紙 青巻き紙 黄巻き紙、とか」

「…蛙びよこびよこ…なんとか、とか？」

「そう、それっす」

「…ある意味^{すこ}凄いな」

「ええ、全然^か噛まないんつすよ。びっくりしました」

「他には？」

「寝耳にウォーター」

「…また覚えたか」

加藤と二人、部屋に大の字になりながら話をしていた。

すっかり真上に昇った太陽は容赦なく部屋の気温を上げていた。

エアコンは完備されていたが、埃を外へ逃がすためにベランダの窓を開けてエアコンは入れずにそのまま汗を流していた。

外では、アパートの壁にへばり付いてるのではないかと思うほどの
蝉時雨せみしぐれが降り注いでいた。

時折さわりと部屋に流れ込む風が、汗のしたたる身体を撫でて幾分か気持ち良かった。

寝転がったままで外を見ると、ただ真つ青な空が広がっていた。

都会のように隣の屋根やらビルの頭といったものに邪魔されることなく、そこに青々と横たわるブルーの真ん中を、飛行機雲だけがすーっと鉄はねを入れるように過ぎていった。

加藤は隣りで寝息を立てていた。

その姿を横目に入れながら、俺もいつの間にか眠っていた。

「…どう…近藤」

遠くで誰かの声がする。しかし至極しごく近くでカレーの匂いがする。

そう思いながらゆっくりと目を開けた俺の真上にキューピー頭の斉藤部長の顔があった。

「う、わあ！」

加藤の言っていたカレーの匂いの加齢臭はこれだったのか。

まだ寝ぼけ気味の頭の奥でそう思いながら飛び起きた。

「人の顔を見てそんなに驚くことはないだろうが」

不服そうな顔を向けながら斉藤部長が文句をつけた。

「そんな至近距離で覗き込む必要ないじゃないですか」

「いくら呼んでも起きないから近づいただけだ。俺だってお前の顔なんか近くで見たくない」

「…部長、いつ戻ってたんですか、コンシェルジュ部屋から」

「一時間くらい前だ。あのコンシェルジュ、なかなか面白い奴だな」
言いながらにやりとする部長の周辺からは、まだカレーの匂いが立ち上っていた。

「…カレー臭い」

加藤がぼそりと呟きながら目を覚ました。

「カレーの加齢臭」

「こら！ 加藤！」

俺は慌てて加藤の口を塞いだ。

「カレー……嫌か？」

その様子をじっと見ていた部長がやや肩を落として呟いた…ように見えた。

「いや、嫌じゃないですよ、カレーの加齢臭…」

「気に入ると思ったんだがな」

「…いや、気に入りはしませんか…」

「他の良かったか」

「…他のって言いますと？」

「牛丼とか」

「…微妙です」

「グラタンとか」

「…それも微妙です」

「若いもんは好きだろう」

「…若いから好きっていうものじゃ無いと思います」

「そうなのか」

「グラタン臭の加齢臭…好きな奴、探すの難しいと思います」

「何を言っている」

訳が分からんという顔をした部長がゆっくりと立ち上がる。

そのまま流しへと向かった部長は、ガス台の上に乗った鍋の蓋を開けながら振り返り、こう言った。

「カレーだ」

「加齢？」

その言葉に加藤が別の意味で反応する。

「そつだ」

部長も別の意味で返事をしていた。

加藤と部長のとんちんかんな会話が交わされるなかで、カレーの匂いは更に部屋に充滿していった。

「カレーを作ったんだ」

「へ？」

「カレーを作ったんだ、俺が」

「部長がカレーを？」

道理で加齢によるカレーの匂いにしては香りが良すぎると思った…とは口に出さずに済んだ俺の隣りで加藤が口を開いた。

「なーんだ、すっかり部長のカレーの匂いの加齢……」

ふがふがともかく加藤の口を押さえながら俺は斉藤部長に向き直った。

「部長がカレーを」

「そうだ、カレーだ」

「いつのまにカレーなんか」

「お前らが寝てる間にカレーだ」

「どうしてまたカレーを」

「コンシエルジュにカレーの箱をもらってな。腹が減ったんで作っ
たんだ、カレー」

「すごいですね」

「お前らも腹が減ったろう。ああでもカレーの匂いのカレーは好き
じゃないとか何とか言ってたな、お前らは食わんか。」

そもそもカレーの匂いのカレーが嫌いなら、カレーの匂いじゃ無い
カレーとは何なんだ、流行ってるのか、そのカレー…の匂いじゃ無い
カレーというのが」

「いえ、カレーの匂いの加齢臭が」

再び加藤の口を押さえ、その頭に拳を下ろしてから慌ててフォロー
した。

寝起きの頭にカレーカレー、そしてまた加齢と、もはや何の話をし
ているのか自分でも分からなくなりそうだった。
とりあえず無難に返事を返した。

「いや。大好きです、カレー」

「カレーの匂いのカレーが好きなんだな」

「はい」

「じゃあ食うか、カレー」

「はい喜んで。カレー」

部屋らしくなった部屋の中央に置いたテーブルを囲み、斉藤部長のこさえたカレーを三人で食した。

途中、「部長、カレーなんて食ったら、またカレーの匂いの加齢

」と加藤が米を吹き飛ばしながら言いかけたところを再び拳で制したのだが、斉藤部長は「カレーの匂いじゃ無いカレー」の言葉がよほど気にかかっていたのか、何度となく「カレーの匂いじゃ無いカレーとはどんなカレーなんだ」と俺に聞いてきた。

カレーの匂いでいっぱい部屋のカレーと加齢の言葉が幾度と無く飛び交い、夏のくそ暑さに拍車を掛けた。

部長の作ったカレーがむやみやたらに辛かったせいもあって、三人ともカレーの匂いの中でカレーを食いながら鬼のように汗を流していた午後だった。

めぞんディコメの怪(仮) その1

部長の作った激辛カレーを食し、しばらく三人で六畳部屋に寝転がっていた。

相変わらず降り注ぐ蝉たちの声はミンミンジリジリとそこかしこに響き渡り、テレビの電源も入れていない俺の部屋は、ただその声だけで埋め尽くされていた。

申し合わせたように時折ピタリとやむ蝉たちの声の合間に部長のイビキが入り込む。

腹の満たされた斉藤部長と加藤はアホのように口を開き、畳の上で眠りこけていた。

早朝に目を覚ましたとはいえ、昨晚わりとゆっくりと眠れた俺は、先ほどの昼寝のせいもあって二人のように眠ることは出来なかった。テーブルの上で空になったカレーの皿を重ね、流しに運び極力音を出さないようにしてそれを洗う。

間抜け面で眠り込んでいる二人を起こさないようにするためだ。

引越し屋の代わりに宅配業者を手配してしまうという考えられないミスを犯したこの二人とはいえ、夜通し俺の荷物を運んでくれたのだ。

そうそう邪険に扱うことも出来ない。二人がいなければ俺の荷物はまだ東京に残っていたはずだ。

一応それなりの感謝は心にあった。ので二人が起きるまでそのまま放っておくことにした。

午後二時を回り、ますます高くなった太陽が下の池を照らしている。あの大きなガマカエルもさすがに顔を出すのは厳しいのだろう。

水面にはただ蓮の葉が青々と広がるだけだった。

部長が靴下を引っ掛けたささくれには黒い糸が残っていた。

座り込み、糸くずと共に尖ったささくれを指で無理やり引っ剥がすと、ペロンと向けた終点の木がささくれた。

そこを掴み、またペロンと引くと再び終点の木がささくれる。
それを繰り返すこと五回、ようやくベランダのささくれは無くなった。

「よし。これで部長が靴下を伸ばし、ベランダに頭を打ち付けることは、もう無いだろう」

立ち上がろうとし、ふとアパートの下に広がる僅かばかりの土の庭に視線を移したときだった。

部長と加藤が乗ってきた青い軽トラの横を過ぎる影があった。

タンクトップにハーフパンツ。内藤コンシェルジュだった。

「内藤さん」

俺は二階から内藤コンシェルジュの頭に呼びかけた。

「ああ、ボンジュール、近藤さん。部屋は片付けましたか」

「ボン…ええ」

眩しそうに目を細め、二階の俺を見上げるコンシェルジュの手には軍手をはめられていた。

「どうしたんですか、こんな暑いのに軍手なんて」

「近藤さん」

「はい？」

「下に降りて来ませんか」

「はい？」

「近藤さんに話しかけられて嬉しいですが、こうやって眩しいなか二階を見上げながら話をするというのは結構しんどいものです」

「ああ、すみません。そうします」

部長と加藤はまだすやすやと眠っている。

起こすのも可愛そうな気がするし、かといって一人で部屋にいてもすることなど何もない。

俺は斉藤部長の半開きの口が広がる顔面をまたぎ、何故かその足元に頭を向けて眠る加藤の身体をまたいで玄関を出た。

めぞんディコメの怪(仮) その2

玄関を開くと蝉の声はますます高くなる。

階段を降りコンシエルジュ部屋の前を過ぎアパートの正面側に回ると、容赦ない陽光が頭に降り注いだ。

見上げる空には太陽以外の何もない。

雲ひとつない真夏の空は、すっきりとどこまでも青かった。

「ボンジュール、近藤さん」

「ボンジュール、内藤さん」

空の青さに心惹かれていた俺は、何の迷いもなく「ボンジュール」などど返事をする。

あまりにもすんなり出てきたボンジュールの言葉に少し笑った。

「お部屋も片付いたようで良かったですね」

「ええ。これで生活ができます」

「斉藤さんともう一方ひとかた…加藤さんでしたっけ、どうされました？」

「疲れきってしまったようで。爆睡中です」

「そうですか」

「ええ。さっきはうちの部長がお部屋にお邪魔してしまつて。すみません」

「いえいえ。誘ったのは私ですからね。なかなか面白い方ですね、斉藤さん」

「そうですか」

「ええ。何だかよく分からない言葉が偶たまに出てきましたが」

「…寝耳に…」

「ウォーターとか何とか。何ですかね、それ」

「すみません、気に入ってるみたいなんです」

「ルー語」

「ご存知ですか」

「いえ、よく分かりませんが、斉藤さんがルー語とかルーとか色々

説明されていたんで、私は話の途中から聞き流してたんですけどもね、あまりにもルー、ルーおっしゃるんで、ルーがお気に入りかと思ひましてね。カレーのルーをプレゼントしたんです」

「…ああ、それでカレー」

「いい香りがしてましたから、カレー作られたんでしよう」

「ええ、ご馳走さまでした」

くくく笑うコンシエルジュと共に池の淵まで足を運ぶ。

コンシエルジュはそこにしゃがみ込み、草むしりを始めた。

軍手をはめていたのは、草むしりをするためのものだったのだ。

そういえば…と思い、池の淵からずっと目を移動し、ぐるとアパートの周辺を見渡す。

雑草はきちんと抜かれ、ところどころに花も植えつけてある。

これだけの田舎町だ。放っておけば雑草にアパートそのものが覆い尽くされるようなことになっても不思議ではないはずだ。

それが綺麗にきちんと手入れされている庭を見て改めて感心した。

「いつも内藤さんが手入れされてるんですか」

「ええ。それが仕事ですからね」

「大変でしょう」

「そうですね、これだけ暑い日は大変ですね。でも好きですから苦痛ではありませんよ」

「池の周りも内藤さんが？」

「ええ、そうです」

「そういえば、ここに住んでるガマカエル、随分とデカいですね」

「え？」

「え？」

「近藤さん」

「はい」

「見たんですか」

「見たんですかって、ガマカエルのことですか」

「見たんですね」

「…ええ、見ました。二回ほど」

「二回も！」

「…そうですね、何か」

「へえ」

コンシエルジュは俺の顔をまじまじと見つめた後、蓮の葉が広がる濁った池に向き直り、「それはそれは」と呟きながら一人頷うなずいていた。

「あの…ガマカエルが何か？」

「そうですね、二回も近藤さんに姿を見せましたか」

「あの…何なんでしょう」

「孝明」

「へ？」

「近藤さんが見たというガマカエルです」

「孝明？」

「ええ」

「ガマカエルですよ」

「ええ。ガマカエルの孝明です」

「あの…もしかしてこのアパートの名前の由来って」

「メゾン・デ・孝明ですか？」

「ええ、ガマカエルから名付けたんですか」

「そうですね」

当然といった顔つきで話をするコンシエルジュは俺の言葉に深く頷いた。

このヘンテコなアパートの名前はガマカエルから付けられたものだったのか。

それよりも気になることは他にあった。

「どうしてガマカエルに孝明…立派な名前を」

「どうしてですかね。昔からそう呼ばれているんですよ」

「昔から？」

「ええ。何でも昔昔、その昔、孝明という位の高いお坊様か何かが

いらつしやつて、この辺りで命の灯が消えたとか何とか。その方の化身とも言われています」

「化身：ガマカエルがですか」

「ええ」

俺は又メ又メとまさに言葉通りに全身がぬめったあのガマカエルの姿を思い出していた。

大きな目玉をぎよろぎよろとさせ、二階から顔を出す俺をじっとみつめた後で「よっこらせ」という感じで目の前の濁った池に身体を沈めたガマカエル。

それが坊さんの化身だというのか。

「坊さんはそれでいいんでしょうか」

「何がですか？」

「いえ、何でもありません」

「しかし近藤さんに姿を見せるとはね」

そうだ、その言葉もひっかかっていた。

「ガマカエル：その孝明になにがあるんですか」

「孝明はね、滅多に姿を現さないんですよ」

「え？」

「この町、明金三丁目の住人でも目にした人は一握りです」

「そうなんですか」

「ええ。幻まぼろしとも幻想げんそうとも言われています。何しろ見た人のほうが少ないんですから当然です。声だけは偶にげーこげーこと聞こえてきますがね。孝明は気に入った人間の前にしか姿を現さないんです」

「そうなんですか」

「そうだということに私がしています」

「：そうですか。微妙な話なんですね」

「しかし、近藤さんは二回も孝明を見たよ」

「はい」

「素晴らしいですね」

「そうですかね」

「歓迎されたってことですよ、近藤さん」

「…ガマカエルにですか」

「孝明にです」

「…喜んでいいんでしょうか」

「勿論です。滅多にないことですからね。きっと良いことが起こります」

「そうなんですか」

「そういうことに私がしています」

「…そうですか。そうだと嬉しいです」

「きつとそうなります。私がそうでしたから」

俺の隣りで草むしりをするコンシエルジュの横顔にはなんとも言えない微笑が浮かんでいた。

それをしばらく見つめた後に深く緑色に濁った目の前の池を凝視した。

蓮の葉の下で時折魚のうろこが陽光に反射する。

目を凝らし、池の隅々まで目を這わせてみたが、ガマカエルが姿を現す様子は無かった。

コンシエルジュの傍には引き抜かれた草がどんどんと積み重なっていく。

することの無い俺もまた手を動かし、コンシエルジュと共に草むしりをすることにしたのだった。

めぞんディコメの怪（仮） その3

池の周りをひたすら草むしった。

すっかり綺麗になった孝明の住む池の周りを見渡す。

草むしりなどしたのは何年……いや、何十年ぶりだろう。

そもそも土の道を見た最後がいつだったのかさえ思い出せない。

こうして土の上に立ち、雑草を取り除く。

何でもないその行為がすごく懐かしく感じられた。

田舎というものはそうだ。一度も訪れた場所ではないにしろ、こうした風景を見るとどこか懐かしさを感じてしまう。

草むしりをして綺麗になった周辺を見た俺はすっかり気分が良かった。

今ならガマカエルの孝明が現れても、そいつを両手に乗せ、そのぬめった身体を撫で回してやれそんな気分でもあった。

さすがに誰かさんのようにそれを口の中にまで入れて可愛がることはできないが。

「近藤さん」

後ろからのコンシェルジュの声に振り向くと、いつの間に戻っていたのか、庭に面したコンシェルジュ部屋の窓を明け、そこに腰を下ろしながら俺に話しかけるコンシェルジュが汗を拭いながら麦茶を啜^{すす}っていた。

「そんなに夢中になって草をむしっていたら熱射病になりますよ、少し休んでください」

コンシェルジュの隣りには、もう一つのグラスが用意されていた。それを指差しながらコンシェルジュが笑いかける。

言われてみれば頭のでっぺんが異様に熱かった。

汗に濡れた首筋がヒリヒリと痛む。

「ありがとうございます」

言いながらコンシェルジュの隣に座った俺は、用意された麦茶を一

気に飲み干した。

「近藤さんに手伝って貰ったおかげですっかり綺麗になりました」

「いえ、たいした手伝いもしてません」

「いえいえ、私ひとりだったら、この状態にするのに、そうですね
…あと10分は掛かってますよ」

「… たった10分ですか」

「10分あったらかなりむしろれますよ、草。それだけの働きをして
下さったということです」

「はあ」

「もう一杯いかがですか」

「いただきます」

麦茶の入ったやかんからグラスに茶色の液体が注ぎ込まれると、揺
れる液体の上をスズメの影が横切っていった。

ひたひたに注がれたそれを、今度は一口啜^{ひた}って膝の上に置いた。

俺は気に掛かっていたことをコンシェルジュに聞いてみた。

「内藤さん、さっきから気になっていたんですけど」

「何ですか」

「他の皆さん、今日はなにされてるんですかね」

「他の皆さんと言いますと？」

「アパートの住人の方々です」

「どうしてです？」

「いや、朝からずつと荷物の運搬をしてたんですけど、その間、誰
も見かけてないんです」

「そうですか」

「まだ起きてないんですかね」

「どうでしょうね」

この話にあまり興味が無いのか、それとも話したくないのか、コン
シェルジュは麦茶を一口啜り、目の前の池のほうをじっと見ている。
そんな様子を見ながら、コンシェルジュが先を続けてくれるのを待
つてみたが、口を開く様子は無かった。

訝りながら更に俺は尋ねた。

「まあ、今日は日曜ですけど、皆さん揃ってお休みってこともないでしょう？　どうして誰も出てこないんですかね」

池をじっと見ていたコンシエルジュが俺に向き直り、ぼそりと呟いた。

「今日はそんな日なんです」

「そんな日？　どんな日ですか」

「誰も部屋から出ないという日です」

「あの…意味が分からないんですが」

「まあ、そのうち分かりますよ、近藤さん」

「そのうちって。少し説明しては貰えないですか」

自分でも眉間に皺がよっているのが分かった。

コンシエルジュの言葉はいまひとつ意味が分からないものが多い。

孝明の話にしてもそうだ。

一体このアパートの周辺事情はどうなっているのか。

「内藤さん、」

「近藤さん」

俺の言葉をさえぎるようにしてコンシエルジュが口を挟む。

「今の話はほんの冗談です」

「はい？」

「皆さん、出かけられてるんですよ」

「え？」

「今晚には戻ってくると思います」

「出かけてるって…みんなですか？」

「ええ」

「一体どこに？」

「それは秘密です」

「え？」

「ま、そのうち分かりますから」

「……」

コンシエルジュはそれ以上言葉を続けようとはしなかった。

話しかけるなオーラが酷く立ち上っており、俺もそれ以上聞くことができなかった。

首に巻いたタオルで額の汗、加えてタンクトップからムツチリと伸びた腕の汗を拭ったコンシエルジュは手にしていた麦茶をゴクリとふくよかな腹に収めると、「さて、草を片付けちゃいましょうか」と立ち上がり、ケツを揺らしながら池の方へと歩いていった。

俺はその後姿をしばらく眺めていた。

雑草をかき集めるコンシエルジュのタンクトップにハーフパンツといったいでたちは、後ろから見るとさながら鏡餅だ。

座り込む腹の肉とケツの肉が段々と積み重なり、丸餅を積み重ねたようである。

あの頭にヘルメットを被せたら、立派な巨大鏡餅だな…などとうでもいい想像をするより仕方無かった。

規則という名の回覧板とは

掻き集めた雑草をアパートの裏に備えてある古い木箱の中にコンシエルジュと共に突っ込んだ。

こうして雑草を溜め込んでおくのは、それを腐葉土として庭に植える花などの肥料として利用するらしい。

「さてと」

草と土で汚れた軍手を外し、それを腹回りにぽんぽんと打ち付けるコンシエルジュの肉がプルンと揺れる。

雑草を詰め込んだ箱の上に軍手を乗せたコンシエルジュはゆっくりと振り向き、ふうつと一息つくと俺に笑いかけた。

「近藤さん、私の部屋で少し休みましょう」

そついうと黒い自室の扉を開け、俺の返事を待たずに中に入っていた。

とりあえず俺も後に続きコンシエルジュ部屋へ上がりこんだ。

壁にそって並ぶちようちんなどは昨日となんら変わりはない。

しかしコンシエルジュの部屋の中は、甘い香りで充満していた。

おもいつきり日本風の部屋に何故か洋菓子店を感じさせるふんわりと柔らかな砂糖の香り。

「何だかいい匂いしますね」

流しで手を洗わせて貰った俺の隣りでやかんにお湯を沸かし始めたコンシエルジュが嬉しそうに笑う。

「そうでしょう。お菓子を作ったんですよ」

「お菓子ですか」

「ええ、昨晩近藤さんがお部屋に戻られてからまた」

「すごいですね」

「好きですからね」

コンシエルジュに促され、昨晩と同じ紺色の座布団に腰掛ける。

窓から入り込む生ぬるい風が部屋の中の空気を揺らし、甘い匂いは

更に鼻先に絡みついた。

業務用並の冷蔵庫を開き、中から何かを取り出すコンシエルジュ。

「素晴らしい、素晴らしい」と呟きながら俺に差し出したお菓子は、何処かで見たような形のものだった。

「あ、これ見たことあります」

「少し前に流行りましたからね」

「なんでしたっけ」

「クイニヤマンです」

「ニクマン」

「どうやったらそう聞こえるんですか、クイニヤマン、です」

「クイ、にやまん」

「クイニーマンとして日本で流行ったお菓子ですよ、クイニヤマン」

「ああ、クイニーマン、そうそれです」

「ブルターニュ地方で最も古いとされるお菓子です、クイニヤマン。ま、フランス語ではないんですけどね」

「へえ」

「ブルトン語でお菓子をさす「クイニー」とバターをさす「アマン」が結びついた名前なんですよ」

「クイニーとアマンが結びついた名前ですか、へえ」

「そうです」

「だったら普通に「クイニーマン」…でいいと思いますけどね」

「それを言っでは実も蓋もないでしょう」

「はあ」

「このお菓子もね、失敗からできたものと言われてるんですよ」

「フランス、意外と失敗だらけですね」

「失敗だらけというのは聞き捨てなりませんね、失敗から学ぶと言ってください」

ぶつと少し吹き出してしまった俺を一瞥し、ピーピーと鳴くやかんの方へ身体を捻じ曲げたコンシエルジュは立ち上がった。

「パン屋のおばさんがパン生地の上にうっかりバターを放置してしましましてね、その生地は使い物にならなくなってしまったんですが、それを無駄にしたくなかったおばさんは、それを何度も何度も折り返してそこに砂糖をまぶして焼いたんです」

「へえ」

「もともとブルターニュ地方は塩作りが盛んでしてね、有塩バターを使う事が多いんです。塩と砂糖の絶妙なバランスで出来上がった奇跡的なお菓子なんですよ」

「へえ」

「だから失敗から学ぶと言ってくださいね」

「…はい」

まだ少し不機嫌そうなコンシェルジュの差し出した日本茶を啜り、目の前のお菓子を一口かじる。

「おお！ まさに塩味しおみと甘味の絶妙なコンビネーション！」

機嫌を直すため、俺は大袈裟に驚いてみせた。

大袈裟に…とはいったが、コンシェルジュの作ったお菓子は本気で旨かった。

「内藤さん、これ、すごい旨いです、この…ニクマン？」

「近藤さん、わざとですか」

「…すみません、笑ってもらおうかと思ひまして」

「気を使ってもらわなくとも大丈夫ですよ」

コンシェルジュの顔にはいつもの微笑が戻っていた。

「いや、本気で旨いです、このクイニーアマン」

「近藤さん、わざとですか」

「へ？」

「クイニヤマン、です」

「ああ今は本気でした。そうでした、クイニヤマン」

「美味しいですか」

「本気で美味しいです」

「それは良かった」

本気で感動する俺を見、内藤コンシエルジュの顔面もほころんだ。ほっとした俺は、二つ三つと続けざまにクイニヤマンを腹に収め、昨晚同様、まるでわんこそばのように空になれば注がれる日本茶をぐびぐびと飲み干した。

庭に止めてある軽トラックの影は、右から左に少し長くなっていた。気がつけばもう夕方になるうかという時刻だった。

昨晚のコンシエルジュの言葉を思い出した俺は、5つ目のクイニヤマンを半分までかじり、5杯目の日本茶を半分飲んでから話を切り出した。

「あの、内藤さん」

「はい」

「昨日の、規則のことですけど」

「規則？」

「ええ。このアパートの規則がどうのこうのって」

「ああ、規則」

「ええ。それについて教えていただけませんか」

俺の言葉に「そういえば」という顔つきになったコンシエルジュは、一度深く頷いてから立ち上がり、隣りの三畳部屋へ移動して何かを持って戻ってきた。

「これです」

コンシエルジュの手には、よくテレビなどで見かける回覧板としてのあれ、何と説明すればいいのか分からないが、板の上に銀色のクリップみたいなものがついた代物に、A4サイズの紙が挟まれている、いわゆる回覧板と言われるそれが握られていた。

回覧板というわりには何の変哲も無いただ真つ白な紙が挟まれているだけで、規則の規の字も書かれていない。

「これ、ですか？」

「ええ、これです」

意味が分からない。

「何も書かれてませんけど…」

「最初はこの状態なんですよ」
「最初？」

「ここに色々書いてもらうわけですよ」
「書いて、もらう？」

「ええ。私がお題を出すんです」

「お題？」

「そうです」

「ますます意味が分からない」

「お題って、何ですか」

「私の気分によって色々です」

「気分……っていうか、お題の意味が分からないんですけど」

「普通の回覧板じゃ、つまらないじゃないですか」

「え？」

「前にもお話したように、コミュニケーションの一つだと思っていただければ結構です。ほら、この町は近藤さんも既にご存知のように何にも無いところでしよう。美しい自然と温かい人たちには恵まれていますかね」

「はあ」

「まさに吉幾三よしいくぞうって言いますかね」

「吉幾三？」

「テレビはあり、ラジオもあり、レーザーディスクも恐らくありますけども」

「…信号ねえ、バスもねえ、おまわり毎日ぐるぐる」

「バスはありますけどね」

「そうですね、この町に来るときに乗ってきました」

「ええ。まあ、それはどうでもいいんですけどね」

「はあ」

「ここの管理は私が一人で行っていますが、何分私の身体も一つしかありませんから、手の回らないことも出てくるわけです」

「はい」

「そのお手伝いをしてもらいたいこともあるんですね、ま、それだけのために回覧板をまわすわけではないんですが、主にそういつたときに私の出すお題に答えていただいて、その評価が一番低い方にお手伝いしてもらおうと考えたんです」

「分かったような、分からないような」

「皆さん、その回覧板を見て楽しんでいただけますし、私もお手伝いをしてくれる方を選ぶことができるので一石二鳥というわけです」
「何だかよく分からないが、偶にこのコンシェルジュがお題を出すという。」

それを回覧板としてまわし、住人がそれに答える。

一番面白くない答えをしたものが、何らかの手伝いをする事になる。と、まあこんな感じなのだろう。

「何だか大変そうですね」

「そうでもないですよ」

窓の外には薄っすらとオレンジに色づいた空が広がっている。

途切れ途切れに並んで飛ぶカラスが、深緑に色を落とした山の向こうへ帰っていくところだった。

「近藤さん」

「はい」

「今夜はもうこれ以上何も食べないでいてください」

「はい？」

「後で内線を入れますので、そしたら下に降りてきてください」

「はあ」

「どうせだったら斉藤さんと加藤さんも一緒に」

そう言うコンシェルジュは湯飲みに残った日本茶を飲み干して微笑んだ。

コンシェルジュの斉藤と加藤という言葉にすっかり二人の存在を忘れていた俺も日本茶を飲み干して「ではまた」と部屋を後にしたのだった。

トウギヤザーできなくてすまん

自室、「レ・ミゼラブル室」の扉を開けると、斉藤部長と加藤の二人はまだ寝転んだままだった。

口を開け、高らかにいびきを繰り返す斉藤部長の足元には相変わらず加藤の頭がある。

驚いたのは、その足に加藤の鼻先がくっついていていたことだった。

「お前、よく平気だな」

感心した俺はそつとその顔元に座り、斉藤部長の足を持ち上げ、さらに加藤の鼻先に押し付けてやった。

「ん……く、くせ……」

寝言なのか本気なのか、加藤は目を瞑ったまま訝しげな顔をしている。

可笑しくなった俺は笑い転げた。

その声に斉藤部長が先に目を覚ました。

「なんだ、近藤、一人で笑って」

「いや、なんでもありません」

斉藤部長の足を持ったままだったその手を離し、笑いをこらえて部長に向き直る。

「人の足で何をしていた」

「何もしてませんよ」

「してただろう」

「起きてたんですか」

「いや、寝てた」

「そうですか、何もしてませんよ」

うんと伸びをした部長の口元によだれのあとがある。

まさかと思い、目を移した畳の上に、よだれの海ができていた。

「部長」

「なんだ」

「そのよだれ、その畳、ちゃんと拭いておいってくださいよ」
「よだれ？」

「そこ、海ができてますから」

「ああ、ホントだ。シーだ」

「シー？」

「いわゆる、海だ」

「分かりにくいですよ、かなり。ちゃんと拭いておいてくださいね」

「オーライ、つまり分かった」

「…はいはい」

部長と俺の会話に気づいた加藤が目を覚ました。

「あれ、何だか薄暗いっすね」

「もう夕方過ぎだからな」

「え、もうそんな時間っすか」

飛び起きた加藤が流しでふきんを絞る部長に声を掛けた。

「部長、もうこんな時間です」

「どんな時間だ」

「夕方過ぎです」

腕時計を部長に向け、加藤が立ち上がる。

「そろそろ出ないと明日の出勤、間に合いませんよ」

「ああ、出勤」

そうだ。明日は月曜だった。すっかり忘れていた。しかし先程のコンシエルジュの話を思い出した俺は六畳部屋に戻り、畳の上のよだれをこすり始めた部長の後頭部に話しかけた。

「部長、内藤コンシエルジュが後で内線をよこすって言うてたんです」

「内線？」

「ええ」

「それがどうした」

「そしたら下に降りてきてくれってことなんですよ」

「ふーん。で、それがどうした」

「良かったら部長と加藤もどうかって」

部長のこする畳の上にはさっきよりも横幅が広がったよだれが伸びている。

うんざりしながらそれを見てみると、加藤が呟いた。

「でも…帰らないとまずいですよね」

何を考えているのだろうか、部長はひたすらよだれをこすっている。時折その手を休めては、また思い直したように畳によだれを広げている。

「まあ、帰らないといけないんなら仕方ありませんね」

「もういいですよ」と部長の手から布巾を取り上げた俺は、それをどうしようかと一瞬悩んだが、とりあえず流しの隅に置いた。

畳の上に四つんばいになった部長はまだ何か考えている。

しばらくそうした後、ふいにヘルメットを装着した部長はどこかへ電話を入れていた。

「あ、もしもし、社長ですか」

どうやら電話の向こうの主は社長らしかった。

「ええ、そうです、ヘルメットの効果は確かでした。しかしまだ検証すべき点がいくつかありまして、もう一日こちらで調べてみたいです…」

そんな会話を交わした後、電話を切った部長は顔をあげて加藤に言った。

「よし、これでコンシェルジュ部屋にいけるぞ」

「え？」

「明日帰ればいいことにした」

「そうっすか」

どうやら今日はここに滞在するつもりらしい。

「コンシェルジュの誘いなら仕方ないだろう」

「部長、随分お気に入りですね、コンシェルジュ」

「ルーをくれたからな」

「そんな理由ですか」

まあいい。一日くらいならこの二人を泊めてやっても害をこうむることはないだろう。

「でも何の用なんですかね」

加藤が俺に呟いた。

「さあ、なんだろうな」

何も食うなと言われたことを思い出した俺は、夕食の誘いだろうと思っていた。

今夜も甘いものか。そう考えると、先程腹に収めたクイニヤマンの欠片が逆流してきそうな気分にもなった。

俺たち三人は畳の上に座り、映りの悪いテレビを見ながら時間を過ごした。

コンシエルジュの内線がくるまでの間、階下から、時々ガタゴトと何かの音がしていたが、テレビに映るルーのルー語が冴えまくっている間、部長の真似事のルー語と笑い声に打ち消され、何の音なのかはよく分からなかった。

時計の針が七時を過ぎた頃、突然部屋に声が鳴り響いた。

もちろん、「コンシエルジュです、コンシエルジュです…」と繰り返すあの内線電話の呼び出し音：呼び出し肉声だ。

初めてそれを耳にする斉藤部長と加藤はかなり驚いた様子で腰を半分浮かせて固まっていた。

「トウギャザーしようぜっ！」とデカイ目を見開き、俺たちに笑いかけるルーの顔が映る画面にリモコンを向けてルーの言葉をさえぎった俺は、「トウギャザーできなくてすまん」と言う斉藤部長の声を背中に聞きながら、内線電話を取ったのだった。

住人達との遭遇

しかし本当にこの内線電話の呼び出し音は何なんだ…と呆れながら持ち上げた受話器から、コンシエルジュの声が漏れていた。

俺が「もしもし」と声を発する前から何やら一人でしゃべっていたらしい。

妙に興奮気味のコンシエルジュに戸惑いながら「近藤です」と返事をした。

「あ、近藤さん」

「はい」

「準備ができましたので、下に降りてきてください」

「準備？」

「ええ。軽トラックがまだあるみたいなので、斉藤さんと加藤さんもうらっしゃいますよね」

「はい、どうやら今夜はここに泊ることにしたみたいで」

「それは良かった。じゃ、お待ちしてますよ」

テンションの上がっているコンシエルジュは俺が「はい」と返事をする前にガツチャリと受話を置いた。

興味津々に俺を見守る部長と加藤に振り向いた。

「準備ができましたって」

「準備？」

部長が口の脇についたよだれの粕をこすりながら呟く。

「ええ、準備ができたって」

「何の準備っすかね」

子供のように瞳を輝かせる加藤は既に腰をあげ、玄関先へ向かおうとしていた。

「なんだろうな、この時間だから夕食か何かだとは思っが…」

俺は昨日の晩を思い出していた。

夕食は殆どをフランス菓子で済ませると言うコンシエルジュの言葉

だ。

加えて日中に喰らったクイニヤマンの後味が口の中で暴れ始めていた。

夕食ということは…ひよっとするとひよっとする。

「加藤」

「はい？」

「お前甘いものは好きだったよな」

「ええ、好きですよ。っていうか大好きです」

「そうか、ならいい」

「なんすつか？」

「いや、なんでもない」

「俺も好きだぞ、甘いもの」

部長が話しに割り込んでくる。

「そうですか」

「スイーツ、つまり甘いもの」

「…そうですか。夕食をお菓子で済ませたことはありますか」

「それはない」

「コンシエルジュ部屋でだされる夕食がお菓子でも文句は言わないでくださいね」

「どういうことだ」

「そういうことです」

とりあえず俺は二人を引き連れて階段を下った。

コンシエルジュ部屋の前に立つと、中から何とも言えない香りが漂っていた。

勿論、甘い香りだ。

「やっぱり」

「なんだ？」

「いえ、なんでも」

訝る部長の声を交わし、呼び鈴に指を添えた。

しかしそこで甘い香りの隙間を縫って別の匂いも漂ってきた。

「肉っぱいっすね」

加藤が俺の代わりに声をあげた。

「オタフクソースの匂いもするぞ」

くんくんとアホな犬のように左右に首を振りながら匂いを嗅ぐ部長も呟いた。

確かに甘い匂いのほかに、腹の虫をぎゅうぎゅうと鳴らす夕食っぱい匂いが漏れてきていた。

俺は少々安心した。部長の作った激辛カレーとお菓子以外を昨日から食っていなかった胃は、素直に肉とオタフクソースの匂いに感謝していた。

呼び鈴に添えた指を押し込むと、『ボンジュール、ボンジュール』と中に響く肉声呼び出し音が外にも漏れた。

「ぶっ」と笑う加藤の頭をこつき、コンシエルジュが現れるのをしばし待った。

カチャリとチエーンの外れる音がすると、ドアは勢いよく開かれた。調度、ドアの影にいた斉藤部長にこれまた勢いよくぶつかった黒いドアは、弾みでもう一度バタリと閉まってしまった。

「いでっ！」

脂で照かる鼻を押さえた部長が足踏みをしている。

それを見てゲラゲラ笑う加藤の姿に俺までも吹き出してしまった。

部長の鼻の脂がついたドアがもう一度ゆっくりと開くと、中からコンシエルジュ…ではない顔によつきりと伸びてきた。

「ボンジュール！」

その見知らぬ顔が「ボンジュール」と言う。

つられた俺たちは躓きながらも三人揃って「ボンジュール」と挨拶を返した。

直後自身の言葉にウケタのか、加藤がまたも爆笑し始めた。

見知らぬ顔の主は男だった。

タンクトップにハーフパンツといういでたちは、内藤コンシエルジュと同じものだったが、がっちりとした体つきに浅黒く焼けた肌を

てかてかと健康的に光らせ、ニカリと笑う口の中の歯もキラキラと白く輝いていた。

ムキムキとタンクトップから伸びる腕を振り回し、再び「ボンジュール！」と叫ぶ声の主は、「ささ！ どうぞどうぞ！」と俺たちに手招きをした。

「あの…内藤、コンシエルジュさんは」

「中にいますよ！」

「入っていいんでしょうか、お邪魔ではないんでしょうか」

「呼んだんですから、邪魔なはずないじゃないですか！ お待たせしてしまつてすみませんね！」

「はい。じゃ、お邪魔します」

「どうぞ！ どうぞ！」

いちいち感嘆符が付いてしまつデカイ声を発する体育会系の男が中に消える。

部長と加藤、そして俺は顔を見合わせた後、靴を脱ぎ、恐る恐るコンシエルジュ部屋に上がりこんだ。

流しから六畳部屋に続く引き戸の影からそつと中を覗くと、コンシエルジュを含めて5人の顔が丸いちやぶ台を囲んで俺たち3人を眺めていた。

一瞬の間があつてから、皆思い出したように声を上げた。

「「ボンジュール！！」」

一体なんなんだ。

砂糖、肉、オタフクソース、更には豆板醤、何となく醤油、もはや無国籍空間へ足を踏み入れてしまったような香りに包まれながら、俺たち三人はしばしばけつとその場に立ち尽くしていた。

どうやら歓迎会

「ささっ！ つつ立ってないで腰を下ろしてください！」

タンクトップにハーフパンツのさっきの体育会系の男がやっぱり感嘆符をつけたセリフで俺たちに座るよう促した。

「どうぞどうぞ」

コンシエルジュが紺色の座布団を三つ突き出した。

「失礼します」

俺たち三人は熱気で白く曇る部屋のちゃぶ台前に腰を下ろした。

それだけでなくとも狭い部屋だ。

俺たちの他に太ったコンシエルジュ、体育会系のガッチリ男、そしてその他大勢。

明らかに六畳部屋にちゃぶ台を囲んでかしこまる人数では無かった。

両脇の斉藤部長と加藤も窮屈そうに身体を縮こめていた。

「座っていただいて何ですが、これから庭に移動します」

コンシエルジュの一言で皆が一斉に立ち上がった。

「え？」

俺たち三人は正座したまま、立ち上がった皆に取り囲まれる形となった。

「さ、立って立って！」

何なんだ一体。

座れと言っという、今度は立てと言う。

意味も無くあせりながら立ち上がった俺たちは、そろそろとベランダから外に出る人間たちを突っ立ったまま眺めていた。

体育会系の男がバーベキューコンロを持ち出し、手際よく点火作業を開始した。

内藤コンシエルジュは巨体を揺らしながら忙^{せわ}しなく肉やら野菜やらを外に持ち出している。

ジューズやらビールやらの入った箱を軽々と持ち上げた中年のおば

さんが、ショッキングピンクのつっかけに、これまたショッキングピンクのペティキュアが施された足を突っ込んで庭を歩き回っていた。

部屋に入って真っ先に目に飛び込んできたショッキングピンクのTシャツにショッキングピンクのスパッツ姿でだ。

「……パー子」

隣りの加藤がもってもらしい台詞を呟いていた。

「……レミ」

逆隣りで呟いた声に驚いた。部長だった。

「どうしたんですか、部長」

「……レミだ」

「は？」

「あのピンク」

「はい？」

「レミだ、あれは絶対」

何を言い出すのかと思ったら……架空の人物レミのことを言ってるのだろうか。

「レミって……レミズワンダフル？」

「そうだ」

「知り合いですか？」

「いや」

違うのかい！ 加藤も興味津々で部長の顔を凝視している。

「先輩、あの人がレミさんですか？」

「いや、知らないし」

「でも今部長がレミって」

「妄想だろう」

「でも何だか……パー子ですけど、レミって感じっすね」
確かに。

全身ショッキングピンクのおばさんは、いでたちはパー子だが、何となくレミズワンダフルオーラを全身から立ち上らせているよう

に見えた。

ショッキングピンクってところが、いかにもワンダフルだ。

「ま、とにかく俺たちも手伝おう」

つつ立つていても仕方ない。

外に食料を運び出しているということは、これから外で夕食会のようなものが開かれるのだろう。

そしておそらくこれは俺の歓迎会だ。

「ちよつとすみません」

後ろからの、か細い声に振り向いたがそこには誰も居なかった。

いや、居たのだが見えなかっただけだった。

少し視線を下に移動すると、マッシュルームカットのチビすけが小皿を抱えて俺を見上げていた。

「そこ、どいてくれませんか」

マッシュルームカットのチビすけが生意気な口調で小皿を抱えた腕を左右に振り、「のけ」と促してくる。

「あ、ごめん」

加藤が俺の腕を引っ張って道を開けた。

「君はレミの子か」

ベランダから外に出かけたチビに部長がまたも話しかけた。

「ちよつと部長、藪からスティックに…」

この状況に少々混乱していた俺は、当たり前のようにルー語を使っ
てしまった。

それを恥じるまもなく、チビがくると振り向き部長を見上げて面
倒臭そうに呟いたのだ。

「そうですけど、何か」

「「ええっ」」

俺と加藤は仰け反った。

そうなのか？ お前、レミの子なのか？

といことは、あのショッキングピンクは…

「あのピンク…レミイズワンダフルなのか？」

恐る恐るチビに聞いてみる。

「違います」

「え？ でも今レミの子だって」

「レミの子です」

「あのピンクはレミ……じゃないのか？」

「レミです」

「ううん？」

なんだ？ よく分からない。

「よく分からないのは、僕のほうです」

こちらの気持ちを理解したのか否か、チビはあからさまに嫌な顔つきをして俺たちをねめつけた。

「あれは確かに僕の母です。そしてレミです。しかしレミイズワンダフルではありません」

「……」

「なんですかワンダフルって。いい年して意味の分からないことを口走らないでください」

「……」

確かにレミだった。そしてこの小生意気なチビはレミの子だった。

「やっぱりレミか」

嬉しそうに頬を蒸気させながら部長が玄関を出ていった。

部長の変な勘……というかただの勘違いから始まったレミの存在と消息。

そのどちらもが今この場で証明された。

ここに来てから可笑しなことばかりだ。

俺と加藤は部長のあとを追うようにして玄関から庭に回った。

昨日の半月はやや肉を増し、満月まであとひと肥えという状態で濃紺の空に浮かんでいる。

部屋の中では気づかなかったが、目の前の田んぼでは蛙の大合唱が鳴り響いていた。

澄んだ夜気が首筋に心地よい。

田舎の夏の夜は、夏と感じさせないほど透明な空気に満ちていた。

「ちよつとこの軽トラ、端に避けてもらえないかしら」

パー子…いや、レミが軽トラの荷台を叩きながら叫んでいる。

「ああ、すみません」

素直に返事をした加藤が急いで軽トラを移動した。

空いた場所にビールケースを並べて、レミが手際よく即席テーブルを作り始める。

その傍で若い男が焼き鳥を食っていた。

つかつかとその男に歩み寄ったレミがガツンと拳を食らわしている。

「マー坊、あんたもちちゃんと手伝いな！」

マー坊と呼ばれ、頭をぶん殴られたソイツは、「いてえなあ」とボヤキながらレミの作業の手伝いを始めた。

コンシエルジュは、オタフクソースの香り高いやきそばをレタスのダンボール箱の上に置き、めいめいの皿に取り分けていた。

その傍に、猫を抱えた若い女がやってきた。

「内藤さん、私も手伝います」

「ああ紗希ちゃん、宜しくお願いしますね」

紗希ちゃん…？ どこかで聞いたような…

紗希ちゃんと呼ばれた女は抱えていた猫を足元に下ろし、内藤コンシエルジュの手伝いを始めた。

「可愛い子ですね」

加藤がにんまりと微笑み、俺に語りかけると、足元にぴたりと寄り添ったままの白い、しつぽの先が黒い猫が「ふーっ！」と俺たちを威嚇した。

自分の女に声を掛けられたような、人間のような目つきだった。

体育会系の男の焼く棒付き肉と野菜から程よい煙が上がっていた。

俺と加藤の腹の虫が同時にぎゅるりと鳴ると、それに応えるように内藤コンシエルジュの召集がかかった。

「ささ、皆さん集まってください。そろそろ始めましょう！」

腹の肉をプルンと揺すったコンシエルジュが軽く手を叩くと、蛙の

合唱が一瞬止んだ。

「ぐえ〜こ」

恐らく孝明だろう。野太い腹の底からの声が一発庭に響き渡る。

それを合図に蛙の大合唱が再び始まった。

げこげこげこげこ、ぐわぐわぐわぐわ……

自然のBGMに包まれながら、メゾン・デ・孝明の最初の宴^{うたげ}が始まったのだった。

やっぱり歓迎会

コンシエルジュの召集に、きちんと手入れされた庭で各々（おのの）の役割をそれとなくこなしていた面々がバーベキューコンロを取り囲む形で集まった。

「もうお気づきかと思いますが」

コンシエルジュは皆をぐるりと見渡したあと、最後に俺に視線を合わせ、一つ頷いた。

「これから近藤さんの歓迎会を始めたいと思います」

「よ！」と体育会系の男の声が澄んだ夏の空気に響き渡る。

プラスチックの容器にビールを注いでいたレミが、手際よくそれを配り歩いている。

俺の歓迎会にも拘わらず、最後に回ってきたビールを受け取り、コンシエルジュに視線を移した。

それを確認すると、コンシエルジュは再び深く頷いて軽くビール容器を持ち上げた。

「それでは近藤さん、一言お願いします」

これと言った挨拶を用意していなかった俺は、「お世話になります」やら「ご挨拶が遅れまして」やら「何卒宜しくお願いします」程度の当たり障りの無い挨拶をした。

「これからトウギャザーしてやってください」

隣りの部長が俺の言葉を締めくくるように言った。

「ぶ」と笑う加藤以外、笑いを上げるものは居なかった。

一瞬の間をおいて、マー坊が声を上げた。

「四露死苦！！」

生の声をして、明らかに漢字のそれに聞こえる暴走族上がりの「よろしく」は、部長の壊した変な空気を余計に掻き乱した。

「ま、乾杯しましょ、乾杯」

というレミの言葉に、生ぬるくなりかけたビールを持ち上げ微妙な

乾杯を交わした俺たち三人とメゾン・デ・孝明の住人達との宴は始まった。

序盤、集まった連中はひたすら物を食っていた。

歓迎会という名に相応しい盛り上がりも何もあったものでは無かった。

ジュージューと焼ける肉の音だけがしつかりと鳴り響いている。

俺に声をかけてくる奴さえいなかった。

どこぞの運動会に紛れ込んでしまった一般ピープルのような心持だった。

歓迎会というよりも食事会、もはや待ち望んでいた配給にありつく様な連中の背中を一步下がって見守った。

配給という呼び方が古いのならば、さながら大食い大会の一場面を見ているようだった。

ヤキソバやら肉やらビールやらが、それぞれの胃に詰め込まれていく。

相当腹が減っているのか、それとただ飢えているだけなのか。

部長と加藤もまた、コンロの最前列に陣を取り、肉にかぶりついていた。

ふと隣りを見ると、マッシュルームカットの小生意気な小僧が立っている。

「何ていやしい」

頭のでっぺんに天使の輪ができているつやつやの髪を僅かに揺らし、
「いっちょまえなセリフを吐く小僧。」

「呆れてモノも言えませんね。あんなにガツガツと。大人げ無い。」

そういえばさつきあなたの後に「トウギャザーしてやってください」とか言っていた人、あれ、あなたの上司ですか。それにも呆れますね。一体何歳なんですか。まったく最近の大人には呆れるばかりですよ」

モノも言えない程呆れているはずの小僧は、こちらが呆れる程、モノを語っている。

「君は食べないのか」

「あそこに混じって食べる気がしないだけです」

頭に乗せた天使の輪がこれほど似合わない子供もいないだろう。

「レミ…君のお母さんもあそこにいるじゃないか」

「まあ、そうですけど」

痛いところを突かれた小僧は、手にしていたオレンジジュースをグイグイと飲み干した。

顎^{あご}を上げ、後ろに下がった髪の毛の輪は、雫の形に歪^{ゆが}んでいた。

コンロから上がる湯気と肉から湧き上がる脂の匂い。

先ほどまで澄んでいた空気は、熱^{あつ}気に少し、湿^{しめ}っていた。

やっぱり歓迎会（後書き）

この作品の更新の見通しがたっておりません。

これから先の話を続けられる自信がなく、近々閉じようと思っています。

読んでくださっていた方には大変申し訳ないのですがご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6815c/>

メロン三丁目、めぞんディコメ

2010年10月9日02時35分発行